



市制施行70周年記念誌

振り返る70年

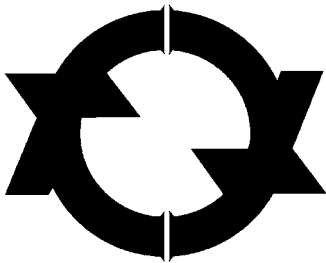


市民憲章

市制施行20周年記念1974年5月15日制定

わたくしたち大竹市民は、古い伝統と美しい自然に恵まれた郷土に誇りと自覚をもち、
豊かで住みよい理想のまちをきずくため、この憲章を定めます。

1. 自然を愛し、環境をととのえ、住みよいまちをつくりましょう
1. スポーツに親しみ、健康で活気にあふれるまちをつくりましょう
1. 働くことに誇りと喜びをもち、若竹のように伸びゆくまちをつくりましょう
1. みんなの幸せを願い、力を合わせて楽しく、明るいまちをつくりましょう
1. 教養を深め、文化のかおり高い、平和なまちをつくりましょう



市章

1954年12月27日制定

1. 片仮名の大（オオ）の意匠化
2. 字と字のつらなる所を竹に意匠化
3. 周囲が円いのは円満なる市政の拡張を表す



コミュニケーション・シンボルマーク

市制施行40周年記念 1994年策定



おおたけPRキャラクター 「コイちゃん」

市制施行60周年記念 2014年制定

市の木

市制施行20周年記念1974年5月15日制定

クロガネモチ



市の花

市制施行20周年記念1974年5月15日制定

サツキ



市長あいさつ

大竹市は、昭和29年9月に、3町1村1地区が合併し、県下11番目の市として誕生しました。

広島県の西端に位置し、瀬戸内海や小瀬川に囲まれ、山間部には三倉岳や蛇喰磐などの雄大で美しい自然を有していますが、地形的に農耕地や居住地が少なく、昭和初期までは主要な産業をもたない地域でした。

そのような大竹市を、先人の皆様が瀬戸内地域でも有数の臨海工業都市として、育て上げてこられました。その努力、その想いに深い敬意を表しますとともに、このまちに着目してくださり、かねてよりご支援、ご協力をいただいております国、広島県、近隣自治体の皆様をはじめ、あらゆる関係者、事業者の皆様方に心から感謝を申し上げたいと存じます。

私は大竹市の宝は「人」と思っております。今日の大竹を築きあげてくださった「人」に感謝し、そしてこれから大竹を創っていただく「人」には大竹を愛し、大竹を誇りに思ってくださいたい。多くの市民の皆様が、幸せを感じながら、わがまち大竹に誇りをもって暮らしていただける、そして「住んでよかった」と感じていただけるまちを目指し、皆で力を合わせて進んでまいりたいと考えております。

この記念誌は、70年の歩みを振り返り現在を見つめ、これから市民の皆様と共に進もうとする明日の大竹市のさらなる飛躍、発展を願って作成するものです。

広くご活用いただければ幸甚に存じます。

令和7年3月

大竹市長 入 山 欣 郎



市制施行45周年記念1999年1月7日制定

市民歌「いざいざ共に」

作詞：石本美由起 作曲：四方章人

- 一. 瀬戸の潮風 心に抱いて 生きる使命に 決意あり
明るく強く逞しい 工業都市の 道しるべ
あゝ活力のまち 大竹市 いざいざ共に
胸をはり 永遠に育てん この誇り
- 二. 水とサクラが 歴史を語る 四季の小瀬川 亀居城
雄々しく高く いつの日も 未来を招け 三倉山
あゝ快適のまち 大竹市 いざいざ共に
手をつなぎ 努力惜しまん この誓い
- 三. 文化培う 自然のめぐみ 海が父なら 山は母
手すきの和紙に 躍進の 明日へ泳げ 鯉のぼり
あゝ感動のまち 大竹市 いざいざ共に
意気高く 我ら守らん この郷土

市制施行60周年記念2014年9月1日誕生

大竹市イメージソング「大竹で生きている」

作詞・作曲：二階堂和美

おはよう こんにちは こんばんは
今日も あの人の 声がする
明るい笑顔と 笑い声
響きあう このまち

おおお おおお おおたけ
おおお おおお おおたけ
おおお おおお おおたけ
おおお おおたけ

大竹で 生きている
大竹で 生きている

大竹で 生きている
大竹で 生きている

生まれてきたの このまちに
お嫁にきたの このまちに
勤めにきてるの このまちに
めぐりあう しあわせ

ラーラーラー ラーラー
ラーラーラー ラーラー
ラーラーラー ラーラー
ラーラーラー ラーラー

みなさん ようこそ こんにちは
今 ここに 生きているわたし
あなたにも つながっています
地球は ひとつです

大竹で 生きている
大竹で 生きている

大竹で 生きている
大竹で 生きている

市制施行70周年連載企画 振り返る70年

「広報おおたけ」2024年4月号～2025年3月号

- 第1回 大竹市誕生
- 第2回 市役所はなぜ小方にあるのか？
- 第3回 玖波発電所は小瀬川ダムのおかげで誕生した!?
- 第4回 『あゝ征長隊』と『大竹音頭』はこうして作られた！
- 第5回 文化会館ができて始まった「市民大学講座」
- 第6回 阿多田島の危機から始まった「昭和49年」
- 第7回 ターニングポイントとなった「昭和49年」
- 第8回 史上空前のイベント『EXCITING WAVE IN OTAKE '89』
「みんな起きろ！」でマラソンイベント
- 第9回 弥栄ダムと弥栄湖スポーツフェスティバル
- 第10回 大竹がバスケで沸いた 広島アジア競技大会
- 第11回 民泊でおもてなし「ひろしま国体」
- 第12回 西暦2000年にあった「文化の国体」国民文化祭

新市役所本庁舎を「小方町役場」とし、新市長が選挙によって選ばれるまでの間の市長職務執行者を玖波町長狭戸尾秀夫氏とした先人たちの思いは、おそらく新たに大竹市民となる人々の調和だったのではないだろうか。

各町村では昭和29（1954）年8月31日に閉庁式を行ったが、小方町は庁舎を新市役所庁舎として引き続き使用するため、9月1日に町役場としての閉庁式を行っている。

新市の一体性確立

大竹市制は昭和29（1954）年9月1日に施行され、合併町村の区域をそのまま市の区域（大字名）とする新市政はすべて合併協定にしたがって展開されることになった。9月10日には旧町村議員全員（大竹町26人、小方町22人、玖波町11人、栗谷村12人、松ヶ原町2人、計73人）による初市議会を大竹支所階上（旧大竹町議事堂）で開き、議長・副議長の選出および各常任委員会の委員などの選任を終えた。初代市議会議長には神尾徹生氏が選任されている。町村合併促進法により旧町村議員はそのまま市議會議員となり、任期の延長期間は1カ年であった。このため市民にとって最大の関心事であった市議會議員選挙が行われたのは、翌昭和30（1955）年

第1回 大竹市誕生

9月1日で市制施行70周年を迎える大竹市。
その誕生秘話をひも解いていきます。



初代 二階堂哲朗市長



市制施行祝賀行事でこった返す観衆（昭和30年）

8月2日であった。選挙は市内5つの選挙区（旧町村区域）で行われ、定数30人のところ50人が立候補し、激しい選挙戦を繰り広げた。その結果、当選した30人の議員のうち、新人は20人当選している。

また、最初の市長選挙は、昭和29（1954）年10月1日に執行され、中川出来太郎氏（元大竹町長・元県議會議員）と二階堂哲朗氏（前大竹町長）が立候補し、市域を二分するような激しい選挙戦を繰り広げた。その結果二階堂哲朗氏が初代市長に当選した。二階堂新市長の市政は何といっても市全体の調和を図り、市の一体性を確立することだった。

しかし、旧町村の歴史の中に育まれてきた住民感情はそれぞれ異なり、また地域的な条件の相違から利害の相反する場合もあって、その実現は容易ではなかった。特に合併の賛成、反対を明らかにして大きく争った旧小方町の合併反対派は当初から新市政に協力しない姿勢であった。それでも市当局の円満解決への努力は続けられ、また、この問題に正面から取り組む市政調停特別委員会を設置するなどして、積極的な解決に乗り出した結果、昭和31（1956）年9月に、ようやく賛成・反対両派の和解が成立、3年にわたる紛争は終止符が打たれたのである。

合併への第一歩

昭和28（1953）年9月、合併によって町村の行政区域を拡大してその行財政能力を高めようと「町村合併促進法」が公布された。広島県では、この法律の趣旨の徹底を図るため、同年10月に各地方事務所を通じて町村合併の意義や目的などについての説明を行い、町村合併への協力を市町村長に要請、11月には町村合併促進審議会を設置し、町村合併に関する具体的な計画の策定並びに指導に乗りだした。当時県下323あった町村を94の町村に再編成する目標をたて、町村合併を急速に進めることになったのである。

市域も戦後の経済復興により、大竹町を中心とする経済圏は県西部の重要な拠点として発展していたが、大竹町と小方町の膨大な旧軍事施設（海兵団や海軍潜水学校跡地で現在は工場群の敷地になっている）が、企業誘致の有力な候補地として注目されるようになっており、両町の利害関係は対立、解決の道は極めて難しい状況となっていた。

旧海軍が設置した水道施設の管理と利用の問題や、三菱レイヨン（株）（現三菱ケミカル（株））が納入する税の配分問題（昭和8年に小方村烏帽子新開へ進出した「新興人絹株式会社」は、昭和27年から「三菱レイヨン株

式会社」へ社名を変更していた）など、両町にまたがって施設があったため、お互いの利害が対立していたのである。もはや合理的な解決策は合併以外考えられなかった。

また、玖波町や栗谷村は財政が逼迫しており、単独での町村継続が極めて難しい状況に追い込まれていた。こうしたことから、お互いが合併して経済圏をより強化し、効果的な発展を図ろうとする空気が次第に高まっていた。

昭和28（1953）年12月1日、大竹、小方、玖波、大野、栗谷、友和（当時松ヶ原地区は友和村だった）の各町村代表者（町長、村長、議長）が小方町で合併についての意見交換を行ったのが合併の始まりである。12月24日には2回目の会合を持ち、「市制実施研究会」を設置して合併に向け一歩踏み出す。

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年4月号掲載

その後、地理的、経済的理由から離脱した大野町を除く関係町村で研究が進められ、利害調整も済み、大竹市制の実施は昭和29（1954）年3月31日とすることで意見は一致したのであった。

ところが、小方町民の間で強い合併反対運動が起きる。「小方町は適正規模の人口である8千人の町であり、三菱レイヨンという大企業もあって財政的にも裕福である。もし合併すれば住民負担が増えることは間違いなく、少しも町民のためにはならない」という理由であった。小方町は大混乱となり、3月31日の市制実施は延期せざるをえなくなったのである。この事態を收拾するため、昭和29（1954）年3月30日付けで町長が辞職、同年4月20日付けで町議会議員が総辞職した。

議場大混乱

5月5日、合併の是非を巡って町長選、町議選が行われ、接戦の末、合併賛成派の町長候補が当選、また町議選も賛成派の勝利に終わった。町民の意志は合併賛成にあることが確認されたのである。しかし反対派は納得できずあくまでも合併阻止をめざした。彼らは「合併」すれば、郷土小方町が消滅してしまうのではないかという不安を払拭できなかったのである。関係町村では、同年9

月1日を期して市制を実施する協議が進められ最終段階に入っていた。

7月28日、大竹町をはじめ玖波町、栗谷村、松ヶ原地区の歴史を変えるかもしれない、運命の小方町議会が開催された。当時小方町では、住民の半数近くが合併に反対しており、議場に押し寄せた反対派住民で傍聴席は満席、場外にもあふれていた。合併関係議案が上程されると、傍聴席は騒然となり議場は大混乱となる。議事が進まないことを憂慮した神尾徹生議長（当時）は、やむを得ず傍聴人の全員退去を命令する。審議は5時間半に及んだという。そしてようやく合併関係議案を可決したのである。この議決を受けた大竹町、玖波町、栗谷村では相次いで合併関係議案が可決された。その後県知事に上申された合併問題は県に舞台が移されることになった。県は8月20日臨時県議会において「大竹市設置に関する議案」を可決9月1日をもって大竹市制を施行する旨を告示した。こうして市制実施は決定的となり、関係町村長は協議の結果、市長職務執行者を玖波町長狭戸尾秀夫氏に決するとともに、玖波町役場内に市制準備委員会事務局（局長狭戸尾秀夫）を設置、職員3人ずつをそれぞれ派遣して市制の施行準備を急いだのである。

新しい市の名前を「大竹市」に、

るのは人口規模だけであり、財政的な面も含め、他は小方町の方が優れている。だから、新庁舎は小方に置くべきという意見が大半であった。

また、玖波町や栗谷村、友和村松ヶ原地区は、距離的な面を重視、大竹と玖波の中間点である小方へ市役所を置くべきと意見は一致していた。

そうした中、広島県地方課（現広島県市町村行政課）も調整に乗り出す。大竹町議会の協議会に地方課長が出席し「新市の名前を大竹にするというのであれば、ここはひとつ市役所の位置は小方に譲るということ、関係町村の調整を図る方が良いのではないか？」という意見を述べている。それでも大竹町議会協議会の議論はなかなか結論が出なかった。だが、合併促進法に定められた期限は刻一刻と迫っていたのである。もはや決断するしかなかった。

市名は「大竹」 本庁は「小方」

昭和29（1954）年7月25日、大竹町議会全員協議会が開催された。合併の形式は「対等合併」、新市名は「大竹市」、時期は「9月1日実施」、新庁舎の位置は小方、玖波、栗谷、友和村松ヶ原地区が希望している「小方」に置くことが全議員の賛成で決定された。小方町が、1週間以内に喜んで合併に応じようと決断をしたならば、大竹町議会として

第2回 市役所はなぜ小方にあるのか？

旧小方町に置かれた新市の本庁舎。その理由を探ります。



大竹市役所本庁舎(旧小方町役場)



旧大竹町役場(昭和17年)

も好意をもって迎えようということに大多数の議員が賛成したのである。そして「対等合併」という立場

を尊重することで、関係町村で決定した「合併建設計画」を決定案通り実施でき、合併問題は円満に解決で

(資料1) 一般会計の歳入額の比較表 (単位:円)

	大竹町	小方町	玖波町	栗谷村
昭和26年	95,591,872	101,480,076	19,768,917	-
昭和27年	104,339,414	117,648,375	29,189,053	30,370,626
昭和28年	95,272,981	107,780,262	25,645,746	32,135,901

なお、市の名前については、昭和36年3月に発行された「広島県市町村合併史」(広島県市長会・広島県町村会発行)によると、①大竹町が従来社会的、経済的にみて広島県西南部の根幹をなしている。②「紙の大竹」として全国的に著名である。③大竹町は市域の人口の半数を占めている。これらの理由から「大竹市」になったと記されている。

(資料2) 人口の推移 国勢調査より (単位:人)

	大竹町	小方町	玖波町	栗谷村
昭和25年	15,684	7,816	3,815	1,323
昭和30年	17,685	8,815	4,379	1,419
昭和35年	19,515	9,184	4,169	1,247
昭和40年	20,785	11,113	4,762	1,052

きるという選択をしたのであった。
なお庁舎について調べてみると、大竹町役場が昭和17（1942）年の建築で面積208坪（約687・60㎡）、玖波町で役場庁舎が新築されたのは昭和21（1946）年9月であり、面積は68・85坪（約227・6平方メートル）であった。これに対し、小方町役場は昭和26（1951）年の建築で面積が275坪（約909・09㎡）であった。つまり大竹町、小方町、玖波町の中で小方町役場が一番新しく、そして最も広い庁舎だったのである。小方町役場が市制施行当時とても狭かったと市史に記述されているが、いずれの役場庁舎が本庁舎になったとしても、手狭な庁舎であった。町制から市制に移ることで業務も増え、新たな部署も必要になったのである。

小方に市役所を置いた理由は、当時の小方町が、合併の条件として強力に主張したためでも、各町村が仕方なく妥協した結果でもなかった。本当の理由は一番新しく、一番広い面積をもつ庁舎であることも考慮したうえで、合併する各町村が合意した「合併建設計画」を決定案通りに実施するため、そしてなによりも円満な合併を実現させるべく、総合的な見地から「対等合併重視」を先人たちが判断した結果だったのである。

市史をひも解いてみると

大竹市は昭和29（1954）年、大竹町、小方町、玖波町、栗谷村、友和村松ヶ原地区が合併して誕生した。市制施行時の人口は31574人で、世帯数は約7000戸、総面積は73・4㎢であった。

「大竹市史 本編第二巻」には市制施行時の様子が次のように書かれている。

市制施行と同時に本庁舎を小方町（旧役場）に、支所を旧町村役場に、出張所を松ヶ原地区に、駐在員を阿多田島および安条地区に置き、市長部局を市長公室ほか16課に分け、さらに法令に基づく執行機関である教育委員会、農業委員会、選挙管理委員会、監査委員等の事務局を置いてスタートした。旧小方町役場であった本庁舎は狭く、とても新組織の行政部門を収容することができなかった。そのため当面の暫定措置として、市長部局では市長公室ほか8課と、他の執行機関では選挙管理委員会、監査委員等の事務局は本庁舎に統合できたが、他の部門のほとんどは旧大竹町役場であった大竹支所に、また市消防本部も旧大竹町消防署内においてスタートしたのである。農業委員会は合併町村の組織がそのまま受け継がれたため、その事務局はそのままそれぞれの支所においた。ま

た、市議会の議場も本庁舎には求められず、旧大竹町役場会議場が使用されることになり、議会事務局のみが本庁舎に置かれた。

ここで一つの疑問がある。それはなぜ「市役所」を一番人口の多かった大竹町ではなく、小方町に置いたのかということである。小方町の庁舎はとも狭く、当分の間は、旧大竹町役場に組織の一部を分化しなければならぬ状況であった。それにも関わらず、なぜ小方にこだわったのか？最寄りの鉄道の駅がない小方に、なぜ市役所を置いたのであるのか？

当時、大竹市への合併については、大竹町、玖波町、栗谷村、友和村松ヶ原地区は推進していたが、小方町だけは住民同士が対立してまで合併反対運動が起きるなど、合併が実現するにはかなりのエネルギーが必要であった。一説には、合併反対だっ

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年5月号掲載

た小方町と交渉する中で、市役所を小方に置くことを合併成立の条件として、絶対に譲らなかつたためだと言われている。では真実はどうだったのか、当時の歴史を探ってみよう。

本庁舎はどの町に

昭和29（1954）年2月、合併関係町村では「新市合併建設計画（案）」が作成されつつあったが、沿岸部にある玖波町、小方町、大竹町と3つの町のいずれに市役所本庁舎を置くかが課題となっていた。玖波町では、「市役所本庁舎の位置は玖波町に置く」としていたが、かなわない場合は玖波町役場を支所という立場で臨んでいた。これに対して、大竹町と小方町はそれぞれ「我が町に市役所を」という考えで対立していた。

昭和29（1954）年3月の大竹町議会の協議会でも、2月までは「未定」であった庁舎の位置と市の名前が議論されている。市役所は住民にとって最も便利な場所に置くべきであり、人口が多く町として発展している、裁判所や郵便局、銀行などがある広島県西部の経済的な中心地の大竹町に置くのが自然であり、経済的な中心地でもなく、人口も大竹町に比べ半数以下の小方町や玖波町に新庁舎を置くというのは、市役所を利用する住民からしても不便ではないかという意見が大勢であった。町

としての機能も備わっている大竹町こそ、市役所の位置としてふさわしいという議員が多かつたのである。

明治以降、大竹村は和紙産業を基礎に商業が発達、佐伯郡内屈指の村に成長しており、明治43（1910）年1月1日から周辺地域の中でもいち早く「町」として発足している。昭和25（1950）年の国勢調査から人口を比べてみると、小方村（小方町になるのは昭和26年である）が8815人、玖波町が4379人、栗谷村が1419人であるのに比べ大竹町は15684人と圧倒的に多い。商業も発達している点から、この地域の経済的中心地とみてもおかしくなかった。

小方町と意見が対立する中、大竹町議会では、当面大竹町役場に新庁舎を置くこととし、いずれ適地を探して新設するというのはどうか、という意見も出てきた。また、合併建設計画をいったん白紙に戻して、一から考え直すという意見もあった。

決断のときは迫る

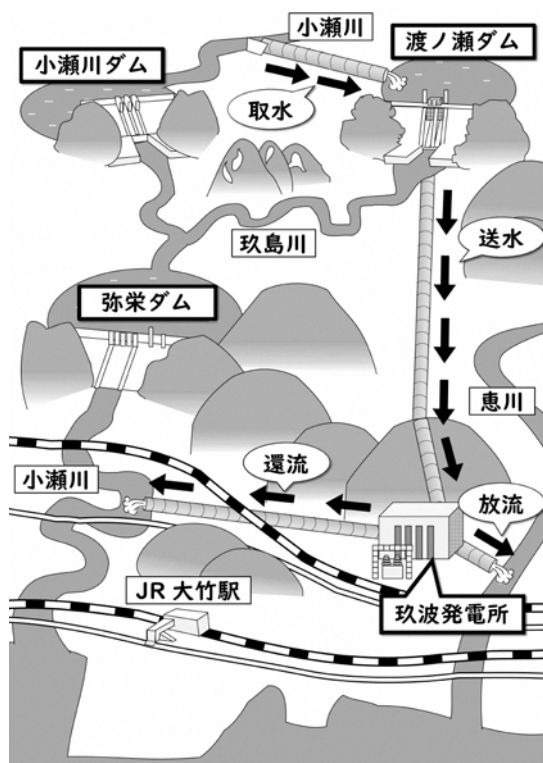
一方、小方町議会では、市の名前が「大竹市」であるうえ、市役所も大竹にということであれば、小方の町が吸収されてしまうのでないか、という不安が大きく、町民の合併反対という機運を強く感じていた。大竹町が関係町村の中で抜きんでい

こうして渡ノ瀬ダムは昭和29（1954）年から本格的な建設事業に着手し、2年余りの工期で約27億円の巨費を投じて、総貯水容量10422万4千m³の貯水池、有効落差225m、常時発電電力6500kW（最大発電電力2万7000kW）の発電施設が建設されたのである。玖波発電所竣工式は昭和31（1956）年4月27日、広島県立大竹高等学校で行われている。玖波発電所は、大竹市が誕生する前からあった計画でスタートした事業で、工業都市を目指していた大竹市にとっては重要な施設であった。もし小瀬川ダムが造られなかったら、玖波発電所は存在していなかったかもしれない。

小瀬川ダム、弥栄ダムの誕生

なお、中国電力が提示した条件の一つに、玖波発電所用水を小瀬川沿岸の防鹿地区に還流させることがあった。玖波発電所で使用された水の半分は発電所のそばにある恵川に流しているが、残りの半分は、発電所から4・2km先の防鹿地区にある市の上水道水源施設の上流約70mの所で小瀬川に戻されている。

第3回 玖波発電所は小瀬川ダムのおかげで誕生した!?



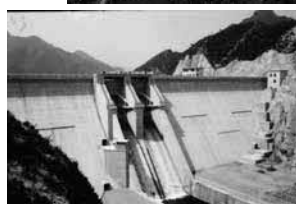
工業都市への道筋をつくった発電所。
誕生までの険しい道のりをたどります。



200m以上の高さにある渡ノ瀬ダムの水を落下させ発電する。手前の建物は発電所の社宅。（昭和30年代）



(右) 渡ノ瀬ダム
【昭和31年完成】



(左)小瀬川ダム
【昭和39年完成】

その後昭和39（1964）年6月、総事業費約18億円、総貯水容量約1140万m³の多目的ダム「小瀬川ダム」は竣工した。このダムの建設によって下流の水量が調節できるようになり、工業用水も1日に7万8千トン増加した。ダム湖は、小瀬川に天然の川真珠貝が多く生息していたことから、この貝の名前にちなんで「真珠湖」と名付けられた。広島県と山口県が共同で管理する都道府県営ダムであり、複数の都道府県が管理業務を行うわが国唯一のダムである。

小瀬川流域はダム完成後も、わが国の高度経済成長に連動するように、人口の増大や、工業地帯の拡大で水需要が逼迫してきただけから、昭和46（1971）年からおよそ20年の歳月と約1000億円の事業費を投じて、建設省（現国土交通省）によって平成元（1989）年、中流部に特定多目的ダム「弥栄ダム」（国土交通省直轄ダム）が建設されている。

工業発展に膨らむ期待

水力発電は、高い所に貯めた水を低い所に落とすことで、その力（位置エネルギー）を利用して水車を回し、水車につながっている発電機を回転させることにより電気を生み出す仕組みである。水力発電所の出力は水量とその落差によって決まり、理論上の出力は重力加速度×水量×落差という関係がある。そのため発電所を建設するポイントは、水量と落差が大きい場所ということになり、急峻な山あいに建設されることが多い。

ところが、中国電力株式会社の水力発電所は玖波にあり、全国的にも珍しい海の近くの水力発電所である。この発電所が建設されたのは、大竹市が誕生して2年後の昭和31（1956）年4月のことである。

この玖波発電所建設にはちよつとしたドラマがあった。玖波発電所建設の問題が表面化したのは昭和26（1951）年のことである。この計画は小瀬川上流部（佐伯町津田）から、流水の一部を約4・8kmのトンネルによって玖島川に誘引し、玖島川を渡り瀬地区でせき止めて貯めた水を利用し、玖波に造る発電所で発電しようとするものだった。この計画が実現すれば、当時小島新開地区の旧海軍施設があった広大な土地

に、電力を供給し誘致しようとする企業も含めた、岩国大竹地区の工業発展に絶大な貢献をすることになると、期待も膨らんでいた。

建設反対！難航する交渉

しかし一方で、玖島川・小瀬川の流水を農業用水として直接利用している住民が、大きな影響をこうむることは必至であった。中国電力はもとより、広島・山口両県は、関係する地域住民に対して計画実現に向けて協力を求めた。しかし、水没する渡ノ瀬地区（当時友和村）の住民をはじめ、直接減水の被害を受ける玖島川流域や小瀬川流域の坂上地区（現岩国市美和町）、小瀬川下流域の住民のほか、ダムや玖波発電所の建設工事および、ダムと発電所を結ぶ送水管等の設置工事によって直接被害を受ける松ヶ原地区や玖波の地域住

民等への補償問題が複雑に交錯して交渉は難航した。

そして昭和26年、27年にかけて「玖波発電所建設の可否」をめぐる知事諮問によって、この問題は正式に提起されることになる。渡ノ瀬ダム建設による減水の影響があまりない玖波町は、発電所からの放流水に対する万全の措置をとることを前提に「賛成」ということになったが、減水の大きな影響を受ける栗谷村や、ダム建設工事の直接の影響が予想される松ヶ原地区の住民は「絶対反対」であった。また大竹町は「条件付き反対」であった。条件というのは「玖波発電所放流水を全量小瀬川本流に還元する」ことである。大竹町はこのことを強く望んでいた。そして小方町は、町としての意思表示はしなかったが、安条や前飯谷、後飯谷、比作、穂仁原、防鹿の川手地区（小瀬川沿い）の住民は「玖波発電所建設反対」の立場であったため、他の地区との反対運動に同調した。

こうした状況の中、地域住民の説得や補償交渉は中国電力によって進められていった。中国電力が提示した具体的な条件は次のとおりであった。

- ① 渡ノ瀬地区の水没補償を行う。
- ② 減水対策として津田地区（現廿日市市津田）に18カ所のため池と3カ所の井堰、釜ヶ原（現岩国市美和町）地区に2カ所の井堰、さら

に渡ノ瀬より下流の減水対策として栗谷地区に6カ所の井堰を設置する。

③ 玖波発電所用水を小瀬川沿岸の防鹿地区に還流させる。

しかし、昭和28（1953）年になっても絶対反対を唱える地域住民との交渉は容易には進まなかった。それどころか、山口県側の坂上村（現岩国市美和町）、小瀬村（現岩国市）、和木村（現和木町）の各村の反対陳情は益々盛んになっていったのである。

打開案に事態は急転

渡ノ瀬ダムを造ることで水量が減るという「減水問題」を解消する良いプランはないのか？この局面を打開するため、中国電力、広島通産局（現中国経済産業局）、広島・山口両県の関係者による協議が何度も行なわれた。そして「小瀬川上流部にさらに別の貯水池を設け、これによって小瀬川の減水を調整するほかに道はない」というプランが考え出されたのである。このプランを持って、建設省（現国土交通省）との中央交渉が積極的に行われた。この結果、昭和28（1953）年も押し迫る12月、広島・山口両県が「小瀬川防災ダム」を建設するということが決まったのである。このプランを持って中国電力は関係住民との交渉に入ったところ、事態は急転する。玖

市制施行70周年連載企画

振り返る
70年

2024(令和6)年6月号掲載

が付け加えられていた。さっそく市議会産業委員会では協議が行われ、「立派な歌詞を一層引き立てて活かす」と云うのであれば、ぜひとも霧島昇にしてみたい。」と強く要望した議員もいたが、島倉千代子との交渉過程や、トップ歌手「島倉千代子」の立場などを推察、「歌手を替えるということはそう簡単にできるものではない！」などの意見もあり、長時間審議した結果、既定方針通り島倉千代子に吹き込んでもらうことに決定した。

一方、『大竹音頭』については、石本が作成した歌詞は16番まであったが、レコーディング可能なのは5番までのため、歌詞を5つ選定し、レコード化された。レコーディングは予定通り、『あゝ征長隊』を島倉千代子、『大竹音頭』を花村菊江・山形英夫で行われ、9月1日にはレコード300枚が大竹市に発送された。

お披露目公演、島倉千代子

9月になると、市は『あゝ征長隊』と『大竹音頭』の踊りを、各地区の婦人会（現自治会女性部）、青年団、小・中学校、保育園などの代表者に普及・指導してもらうため、大竹市内在住の花柳小豊と天野令光の2名に依頼した。この普及活動によって、市内全域に盆踊りとして『大竹音頭』の踊りが定着していった。

第4回 『あゝ征長隊』と『大竹音頭』はこうして作られた！

トップスターによる『あゝ征長隊』。広く市民に親しまれてきた『大竹音頭』。その誕生は67年前にさかのぼります。

（右）養和会館で行われた発表会。右端の日本髪の振り袖姿が島倉千代子（左上）当初発売された25cm 78回転のSP盤（左下）再発売された17cm 45回転のドーナツ盤。



【注釈】※1『大竹小唄』：大竹町が制定した曲。作詞は山本康夫、石本清四郎、石本美由起、新上一武の4人であった。作曲は山本寿である。※2島倉千代子：「島倉千代子は、三橋美智也とならんで、レコード界の二大新星であるという。ファンレターが日に平均400通。華やかなトップスターだが、まだ19歳である。高校生の時にコロムビアの第五回全国歌手コンクールで優勝『この世の花』をキッカケにとんとん拍子に人気と地位を築き上げた。」昭和32（1957）年11月12日付け中国新聞記事より※3霧島昇：戦前から戦後にかけて活躍した流行歌手。代表曲に「愛染かつら」「旅の夜風」（ミス・コロムビアと）「誰か故郷を思わざる」「リンゴの唄」（並木路子と）などがある。

社としては25万にと言ってきたのですが、いろいろと頼み込んで、上原先生のも入れ22万ということに、今日決定しました。…」とあり、石本が強引に頼み込んだ様子が、目に浮かぶ。

石本は、財政難の中で郷土大竹市が自分を頼ってくれたことに深く感じ入り、会社に頼み込んだのである。彼が郷土を思う気持ちは、後に「大

竹というふるさとがなかったら、作家石本美由起は、この世に存在しなかった。大竹は翼休めに帰ると、人の情けに泣くところ」と語っているが、この当時も相当のものであった。（石本は生前作詞家ではなく作家と称していた）

発表会は、11月4日、第1回目が正午から、第2回目が午後3時からそして第3回目が午後6時から、三菱レイヨン大竹工場養和会館において行われた。入場券は10月8日から、1枚150円で販売を開始、2441枚を売り切っている。また、レコード売り上げは1枚350円で288枚の売り上げだった。こうして発表会は大盛況の内に終了したのである。その後『あゝ征長隊』は昭和33（1958）年8月15日から、コロムビアより全国発売され、当時の芸能雑誌『平凡』と『明星』に掲載された。石本は、2つの芸能雑誌に大きく取り上げられたうれしさからか、このことを早速郷土に知らせた。

当時の資料から、市も石本も『あゝ征長隊』を主力の郷土民謡として制作したと思われるが、制作されて67年が経過した今、多くの市民に親しまれている曲は『大竹音頭』であり、『あゝ征長隊』を知らない市民が多いことを石本はどう思っているだろうか。

郷土民謡誕生前夜

大竹市が誕生してから作られた曲の第1号が、『あゝ征長隊』と、今でも盆踊りなどでおなじみの『大竹音頭』である。

『あゝ征長隊』と『大竹音頭』は大竹市が、郷土出身の作詞家である石本美由起に依頼して作った郷土民謡である。石本は、昭和23(1948)年に『憧れのハワイ航路』が爆発的なヒット曲となると、2年後の昭和25(1950)年に上京、コロムビアレコードの専属となっていた。

その制作秘話は、昭和31(1956)年の暮れごろ、当時市議会副議長だった長谷川行雄が上京し、旧知の石本に会い、『大竹音頭』と『大竹小唄』の2曲の制作について語り合ったことから始まる。長谷川は、スタートしたばかりの大竹市にとって、観光や商工部門の観点からも、『大竹小唄』なる曲をぜひとも作りたいと、密かに熱く願っていた一人であった。他市の市勢要覧や観光宣伝を見ても、小唄のないところはほとんどない。市制施行祝賀会の折にも「市の唄を作ったらどうか」という話が出たが、まだ実現していなかった。とはいえ、長谷川と石本が会ったこの段階は、市が正式に曲の制作を決定する前のことであり、長谷川は、まず石本の意向を確認する

ために上京したのである。石本は、故郷からの思わぬ依頼に大変喜び、良い曲を作りたいと願った。

市に残されている簿冊に、石本から長谷川に宛てた昭和32(1957)年1月13日付けの手紙が残っている。この中で石本は『大竹音頭』の進行ぶりを尋ね、良いものを作りたいと抱負を述べた上で、「…決定したら至急一報願います。できれば夏の盆踊り迄にレコード発売出来るようにしたらと愚考しています。」と記している。

昭和32(1957)年5月、合併後の財政が厳しい中、市は市議会へ『大竹小唄』制作の議案を提案した。市議会では『大竹小唄』の制作に異議なく、市議会産業委員会を主体として研究を進めることが了承された。歌手は『大竹小唄』を当時の人気歌手青木光一と花村菊江が、『大

竹音頭』を新進売り出し中のトップスター島倉千代子(当時19歳)と山形英夫が吹き込む計画で、いずれの曲も、作詞は石本美由起、作曲は上原げんとであった。続いて6月の市議会全員協議会に『大竹小唄』『大竹音頭』制作および発表会開催の予算案が提案され、「市財政逼迫の折、財源をどうするのか」などの意見が出たが、「税金の投入を50%にして残りを、入場料や寄付金、レコード売上金で賄う」ということで制作を決定した。予算総額は103万6千円だった。

石本も、二階堂哲朗市長より「正式に決定した」との電報を受け取ったときの気持ちを長谷川宛ての手紙で「市長より、決定の電報にあり、安心したり、感激したりして居ります。」と伝えている。

『大竹小唄』から『あゝ征長隊』に

市は7月、日本コロムビア株式会社より、レコード300枚の製作費について正式な見積書を受けとった。見積書には、A面『大竹小唄』島倉千代子、B面『大竹音頭』花村菊江、山形英夫となっていた。当初考えられていた青木光一と花村菊江で歌う『大竹小唄』ではなく、島倉千代子のみが歌う『大竹小唄』に変更されていたのである。おそらく、石本は5月末から6月にかけて、市

から制作の依頼のあった『大竹小唄』を、まったく曲想の異なる『あゝ征長隊』とする構想を固めていて、島倉千代子の歌声がその曲想に合うと決めていたのだろう。社内会議で、彼はその構想を熱く語り、当時他の自治体で多く作られていた、従来からある民謡調ではなく、流行歌に近い『あゝ征長隊』の企画になったと思われる。実は、『大竹小唄』※1は戦後の大竹町時代に既に作られており、この作詞に石本自身もかわっていた。推測だが市から依頼のあった『大竹小唄』は既に存在していることも、『あゝ征長隊』という曲にした理由の一つであろう。

石本は、7月18日には2曲の作詞を終え、原稿を市へ送付している。『大竹小唄』は『あゝ征長隊』というタイトルで、幕府軍と長州軍が戦った「長州戦争」のことが描かれていた。幕府による「長州戦争」で大竹市は芸州口の戦場となった歴史がある。この曲は、市側の希望を入れ、全国発売を視野に入れた歌詞となっており、レコード吹き込み(レコーディング)は7月27日に予定されていた。

ただ、その原稿には、コロムビア側からの『あゝ征長隊』は男性歌手が歌った方が似合う歌詞なので、島倉千代子※2よりも霧島昇※3の方がいいのではないか」という一文

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年7月号掲載

昭和51（1976）年の第11回からは、毎年増加傾向にあった講師の謝礼予算を抑えることもあり、講師はNHK解説委員1人と3人の著名人からなる4回講座のスタイルとなった。このスタイルは昭和61（1986）年の第21回まで続く。さらに、昭和62（1987）年の第22回からは講師が3人となり、著名人のみの講座になった。このころになると、「市民大学講座」は市民の間で夏の恒例講座として定着、平成5（1993）年の第28回まで継続された。

また、第1回から会場となってきた文化会館大講堂が、平成元（1989）年に都市計画街路「中市立戸線」建設のために取り壊されることになったため、平成2（1990）年の第25回「市民大学講座」からは、隣地の消防署跡地に建設されたアゼリアホールで開催することとなった。

「市民文化講演会」として再始動

その後、平成6（1994）年が市制施行40周年となることから、新しく名称を「市民文化講演会」と変更して再スタート、平成12（2000）年の第7回まで、講師3人のスタイルで継続されていくが、第8回は講師が2人、第9回は、とうとう講師が1人となってしまった。背景には、バブル経済破綻の後の税収の減収や、平成初期からの景気回復を

第5回 文化会館ができて始まった「市民大学講座」

市民の知識・教養を高める目的で昭和41年から始まった講演会形式の「市民大学夏期講座」。名称や内容を変えながら平成26年まで継続されてきました。その変遷をたどります。



目指した公共事業への投資などの負債が重くのしかかり、市財政が逼迫してきたことがあった。この時代多くの自治体が財政難に苦しんでお



（上）平成24年の講師、香山リカ氏（精神科医）、勝間和代氏（経済評論家）、平成26年の尾木直樹氏（教育評論家）の開催案内の広報紙（左）昭和42年の曾野綾子氏（作家）の講演。受講者が大幅に増えた。（右）長く文化活動の重要な役割を担ってきた文化会館。

り、県内でも有数の財政優等生であった本市も例外ではなく、行財政の見直しを迫られていたのである。平成15（2003）年の第10回以

降では、市民文化講演会の単独予算では講師1人が精一杯であり、人権教育講演会の予算や外部団体との共同事業など、他の予算との組み合わせによって捻出するなどの工夫をして、なんとか講師3人を確保して行われたが、長くは続かなかった。

平成20（2008）年の第15回からは講師が再び1人となり、実施時期も8月ではなく、9月や10月実施が多くなった。平成24（2012）年の第19回は講師2人で開催されたが、翌第20回からは講師1人となり、ついに平成26（2014）年に実施された第21回、教育評論家の尾木マコトと尾木直樹氏が講師を務めた講座が最後となった。市はこの年が市制施行60周年の節目の年にあたることから、事業評価を改めて行い、「市民の知識や教養を高め、より豊かな生活を築き、住みよい町づくりに役立つよう」と願った所期の目的は、ある程度達成できた」と判断し、「市民文化講演会」は、長い歴史に幕を下ろすこととなったのである。「市民大学夏期講座」から数えて通算49回目の講座であった。

※文中にある「NHK解説者」と「NHK解説委員」については、当時の広報おおたけの記事を原文のまま掲載しており、同一の役職なのか不明です。

社会教育活動の拠点「文化会館」開館

公民館活動が地域の社会教育活動の推進に大きな役割を果たすようになったのは、社会教育法が制定された昭和24（1949）年以降のことである。

市域の昭和30年代における広義の公民館としては、町村立の大竹公民館【昭和23（1948）年設立、現在の大竹中学校敷地にあった旧海軍下士官集会所を利用】玖波町公民館【昭和25（1950）年設立】栗谷村公民館【昭和28（1953）年設立】の3館のほか、地区ごとに地域住民が自主的に設立した8館の公会堂などがあった。これらの諸施設は各町村における社会教育活動の中心として活用されるほか、青年団、婦人会、PTAなどの各種団体にも積極的に利用され、地域社会の発展に大きく役立ったのである。

昭和38（1963）年11月には大竹公民館に替わって、大竹市文化会館（アゼリアおおたけの前身）が建設され、市域における社会活動の中心として活用されるようになった。それまで市民に親しまれていた大竹公民館は、旧海兵団跡地（現在の三井化学㈱大竹工場）への企業進出に伴い、同地に設置されていた大竹中学校の移転先に決定したため、昭和36（1961）年8月に閉館、取り

壊された。

ほろ苦いスタート「市民大学夏期講座」

文化会館内に新しく社会教育課が配置されると、さまざまな社会教育講座が展開されていき、昭和41（1966）年7月には従来からあった「会館大学」を「市民大学教養講座」と改めて、読書会、短歌教室、俳句教室、川柳教室などの初心者のための講座を無料で開設していった。さらに、同年8月には教養を高め生活を豊かにする目的で「市民大学夏期講座」も臨時に開設。広島大学の教授陣をはじめ、専門分野の講師を招いて7日間の集中講座をスタートさせた。この講座は、全講座受講で1000円の受講料だった。（当時の高卒公務員の初任給は1万6100円）第1回市民大学夏期講座の受講者数は、延べ1090人で1講座平均の受講者

数は156人。1講座の定員が650人だったから、定員の4分の1に満たないほろ苦いスタートとなった。

そこで、教育委員会は、翌年の第2回「市民大学夏期講座」の受講者数を増やそうと企画を練り直し、出されたプランが、中央で活躍している作家曾野綾子氏や評論家の大宅壮一氏を加えた7回講座の開設だった。これが大当たりし、受講料を200円と倍増したにもかかわらず、なんと延べ2340人も市民が受講し、第1回受講者数の倍増以上という大盛況の結果となったのである。以後「市民大学夏期講座」には、必ず中央で活躍している著名人を2人は加えるようになる。

しかし、なぜか受講者数は第3回が延べ1677人、第4回が延べ1064人と減少傾向が続く。教育委員会は、改めて受講者数の低迷の原因を探り、おそらく受講者数の減少は「7回」という講座数に一因があるのだろうと分析した。そこで第5回から講師を7人から5人にしてみるが、延べ受講者数は841人と低迷、一向に受講者数の増加にはつながらなかった。

ところが、昭和46（1971）年の第6回講座では、第1回から講師をしていた大学教授に代わって、NHK解説者1人と著名人4人が講師を務める5回講座として開講したと

ころ、受講料を300円と値上げしたにもかかわらず、延べ受講者数は2474人と過去最高になったのである。当時はちょうどカラーテレビが普及し始めたところで、テレビで見たいという市民が増えたことにも一因があったのだろうが、広報での受講者募集の記事に、講師陣の顔写真を初めて掲載、それまでの文字だけの一覧表から切り替えたことも大きな要因となったと考えられる。

著名人を講師に「市民大学講座」

こうして、当初は臨時の短期集中講座としてスタートした「市民大学夏期講座」は、「年に1度は著名人の講話が聴ける」と好評を得て、市民の間に浸透していった。昭和47（1972）年の第7回講座からは名称を「市民大学講座」と改め、NHK解説委員1人と4人の著名人というスタイルのまま、第10回の昭和50（1975）年まで続いた。なかでも昭和48（1973）年の第8回講座では、作曲家の高木東六氏（人気音楽番組の審査員）、女優の山東昭子氏（現参議院議員）そして前年のミュンヘンオリンピックで、男子バレーボールチームに金メダルをもたらした、元監督の松平康隆氏が講師だった影響もあり、延べ受講者数は3050人と過去最高を記録している。

市制施行70周年連載企画

振り返る
70年

2024(令和6)年8月号掲載

地区の集落は、地元消防団を始め、自衛隊、海上保安庁、警察機動隊、市消防、米海兵隊等多くの人たちの協力で奇跡的に守られたのである。

※昭和47（1972）年8月8日、
中華民国（現…台湾）の医師、陳永福医師が阿多田島診療所に着任している。

さらなる試練

阿多田島壊滅の危機を奇跡的に回避したのもつかの間、阿多田島にはさらなる試練が待っていた。山火事の原因はタバコの火の不始末と言われているが、昭和48（1973）年11月から雨らしい雨が降っていなかったのも火災が拡大した一因であった。雨が降っていなかった阿多田島では、簡易水道の本浦貯水池（2700トン）の水が減る一方で、12月11日からは、毎日午前8時から午後4時まで断水という第1次節水の対策を採っていた。そして火災が発生した1月9日からは、断水をさらに強化し、午前6時から3時間、午後4時から4時間と1日7時間給水の第2次節水をする事になったのである。しかし給水制限には限度があり、市水道局は当面の飲料水を本土から運搬することにした。1月12日から3日間、三原市の給水運搬船を借りて1回に500トンの水を3回運び、本浦貯水池の水は何とか1500ト

第6回 阿多田島の危機から始まった「昭和49年」

市制施行20周年の年は、市にとってさまざまな出来事が起こり、大きな転換期を迎えた年といえます。そんな昭和49年を今月号と来月号にわたり振り返ります。

ンとなった。その後も第2次節水は継続されたが、1月21日、願いが天に通じたのか待望の雨が17ミリ降ったため、第1次節水に緩和され、窮地を脱している。

※本土からの海底送水管が完成す



玖波公民館



大竹駅落成式

るのは、8年後の昭和56（1981）年12月14日のことである。

生まれ変わった大竹駅駅舎

阿多田島が危機を脱した2月6日、国鉄大竹駅（現JR大竹駅）が

新しい駅舎に生まれ変わっている。鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積が839㎡の駅舎で、1階改札口の近くには大竹市の特産品展示コーナーが設けられ、紙や繊維、石油化学製品、ゴム手袋など市内の工業製品が展示されていた。当時大竹駅に停車する列車は特急が4本、急行が17本のほか快速電車など1日81本で、1日当たりの乗降客数は約6700人だった。（令和4年時点では1日114本、1日当たりの乗降客数は2700人）

駅舎の改築に先立ち4300㎡の駅前広場の整備は、昭和47年度事業で完成し、緑地帯に大きなワシントンヤシとツゲが植えられたのも、「みどりの窓口」が開業したのもこの時である。なお、令和5（2023）年2月、JR大竹駅の駅舎はちょうど半世紀ぶりに新しく生まれ変わっている。

鉄筋コンクリートの玖波公民館完成

現在の玖波公民館が、完成したのもこの年の9月である。鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積が1214㎡、各室には冷暖房が完備された最新の施設で、当時の予算で1億1千万円の事業費であった。半世紀もの長きにわたって地域住民の学習の場として利用されてきた玖波公民館も、令和8年度末には新しく生まれ変わる予定になっている。

昭和49（1974）年は大竹市が誕生して20年目の節目の年である。昭和29（1954）年9月1日に大竹市が誕生して以来、企業誘致による財政基盤の確立や、都市計画事業を推進し工業都市として着々と発展しつつある時代であった。市の歴史を俯瞰した視点でとらえたとき、この年、大竹市は創業期から発展期へと新たな段階に転換する分岐点となった年ではないかと思える。そんな歴史的出来事があった年である。

阿多田島壊滅の危機!?

この年の初め、大竹市は阿多田島壊滅の危機に遭遇する。

1月9日午後7時5分ごろ、阿多田島でタバコの火の不始末から山火事が発生したのである。出火場所は、島の南側で通称「岩室」と呼ばれている地区。早速、地元消防団が消火活動にあたったが、火勢は北に向かって広がり、島で最も高い高山（標高204m）の頂上を越えて、民家が密集する本浦地区に迫る勢いであった。

この事態を憂慮した市は、翌日午前2時に県知事を通じて陸上自衛隊に応援を要請するとともに、災害対策本部を設置した。要請を受けた陸上自衛隊第13師団の隊員236名は、午前6時20分に小方港へ到着、待ち構えていた海上自衛隊の輸送船に分乗して火災現場へ向かった。

また、米海兵隊岩国航空基地隊員約30名も上陸用舟艇で駆け付け、消防団や約40名の県警機動隊員とともに懸命の消火作業にあたった。さらに海上保安庁も市消防本部の要請に応じて巡視艇を派遣し、夜通し消防隊や機材の運搬に協力したのである。当時阿多田島航路にはフェリーは就航していなかった。

※大竹市は昭和30（1955）年4月13日に、米国海軍航空隊第955部隊と「消防相互援助協定」を結んでいた。

※阿多田島航路にフェリーが就航するのは昭和60（1985）年3月30日のことである。

これら各方面からの応援による700名近い消火隊は、尾根から海岸までの雑木を伐採し、枯れ草を刈り取って防火帯を作り延焼を懸命に防いでいった。陸上自衛隊員たちは

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年9月号掲載



(上) 消火活動に従事する陸上自衛隊員(下右)島の南側から出火した炎は島の約半分を焼き尽くした(下左)島に水を運ぶ小方港の給水運搬船。

消火液の入った噴霧器や水タンクを背負い、特製の「火タタキ」を持って、火の手を食い止めるため、山の斜面に展開しながらの必死の作業であった。

一方、阿多田島婦人会（現…阿多田区自治会女性部）も徹夜で炊き出しを行い、2年前に台湾から招聘さ

れた陳先生の阿多田島診療所も夜間開業してけが人の手当てをするなど、島は大変な混乱ぶりであった。

懸命の消火作業の結果、1月10日正午には、さすがの猛火も火勢が衰え、午後1時半、島（面積239ha）の約半分にあたる110haを焼いてようやく鎮火したのであった。本浦

ており、20周年の記念式典は昭和49（1974）年5月15日であった。理由は不明であるが9月ではなく、奇しくも二階堂市長自身が出席した最初の記念式典と最後に出席した記念式典はともに5月のことで、市の花『サツキ』が咲きそろふ季節であった。以後、周年記念式典は5月には行われていない。

歴史の分岐点に

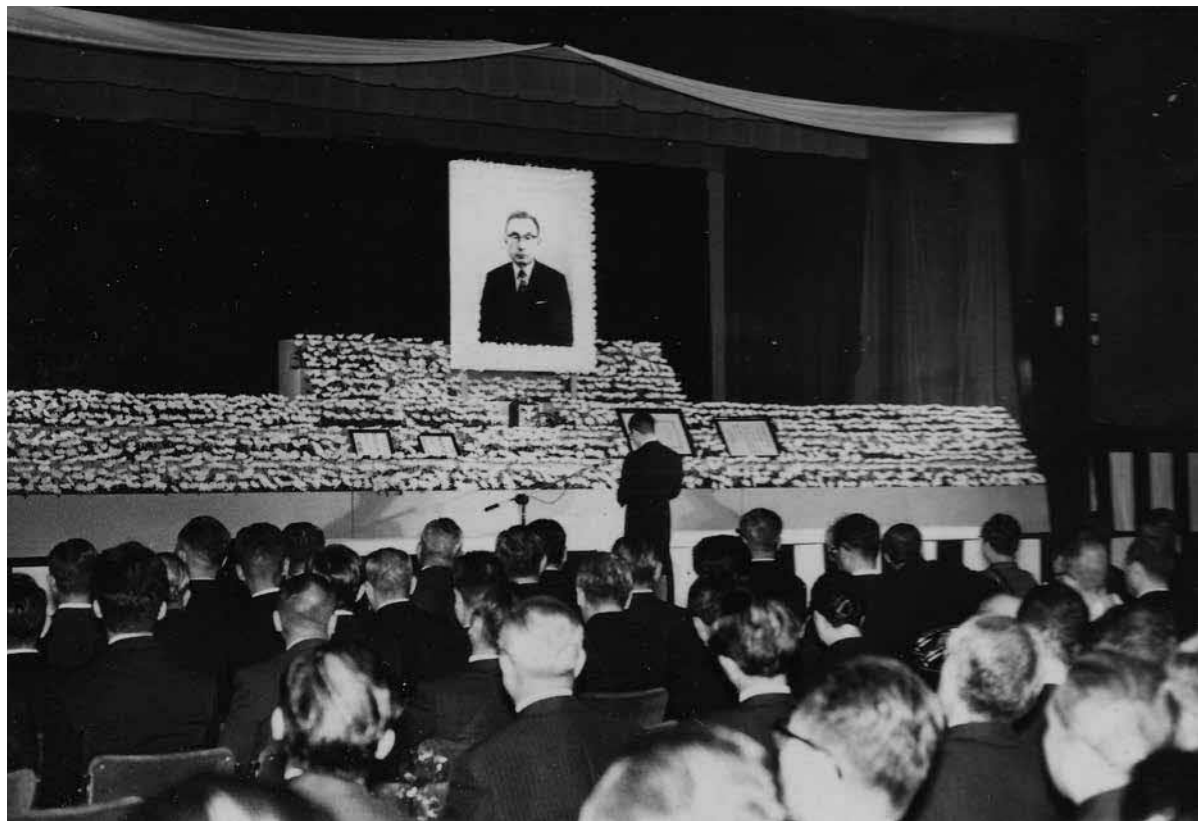
昭和49（1974）年は、人間の不注意で阿多田島が半分焼失した山火事と、自然の力による阿多田島の深刻な水不足という阿多田島最大のピンチが始まった年であった。また、大竹駅舎が新しくなり、交通の拠点に生まれ変わった年で、今後10年間のまちづくりの指針となる『大竹市総合計画書』の策定が開始された年でもあった。市民憲章が制定され、市の木『クロガネモチ』、市の花『サツキ』の発表、近代的な玖波公民館の完成、『公害追放宣言都市』の決議と、まちづくりがステップアップした年であった。そして大竹市の草創期を担ったリーダー二階堂市長に代わって、新しいリーダー神尾徹生市長が登場したのはまさにこの年であった。歴史的な視点でとらえると、昭和49（1974）年は大竹市にとっての分岐点（ターニングポイント）となった年だったのである。

第7回 ターニングポイントとなった「昭和49年」

市制施行から20年を迎えた昭和49年。まちの草創期をけん引したリーダーの突然の退場と、新たなリーダーが誕生した年でした。



市内各地で市の花サツキの苗が配られた（写真は西栄）



急逝した二階堂初代市長の市葬が市体育館で執り行われた（5月30日）

『市総合計画』の始まり

市が誕生して20年、昭和30年代に行われた企業誘致により、広島県西部における臨海工業都市を形成、その後日本経済の成長につれて、工業都市として成熟段階に入っていた。生産機能を拡充するに従い公害問題が次第に表面化、生活環境の保全が市行政の主要な課題となってきたのもこの頃である。それまでの地域経済の成長を工業化に求め、それを市のまちづくりの基盤とした発想に、方針転換が迫られていた。

昭和49（1974）年4月30日、文化会館（アゼリアおおたけの前身）で『第1回大竹市総合計画審議会』が開催され、市民の生命と健康を守るために、生産機能が過度に域内に集中することを抑え、市民に快適な生活環境を保障し、行財政を通じて所得の公平な配分を実現することで、市民福祉を増進することを基本理念としたのであった。これを受け、1975（1985）年の行政の指針である『大竹市総合計画書』は22回の審議会を経て、昭和51（1976）年12月に策定されている。また、議員提案による『公害追放宣言都市』の決議がなされているのもこの年の12月議会である。

市制施行20周年

市制施行20周年記念行事は、5月

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年10月号掲載

15日から20日の6日間にわたって盛大に市内の各会場で繰り広げられた。しかし市の誕生から20年の間、順風満帆であったわけではない。誕生直後は財政赤字となり、「財政再建」が急務であった。昭和37（1962）年には厚生省から『赤痢予防特別対策地区』に指定され、3年間は対策に追われた。他にも公共下水道事業は緒に就いたばかりで、小・中学校の整備、保育所の建設、消防署の建設と課題は山積みであったが、市民プール、文化会館、市体育館を建設し、少しずつ都市基盤を整備するなど広島県西部の拠点となる工業都市として成熟しつつあった。

この20年間を振り返りながら、5月15日文化会館で行われた「記念式典」では、新しく市民憲章制定宣言、市の木『クロガネモチ』、市の花『サツキ』の発表、おおたけの唄『大竹

ばんざい』（石本美由起作詞）の発表などが行われている。『市民憲章』は印刷され各家庭に配布された。

驚くべきニュース

市域が市制施行20周年を祝うムードでいっぱいだったちょうどその時、驚くべきニュースが市中を駆け巡った。5月15日の記念式典に元気をあせていた、二階堂哲朗市長が5月20日、心筋梗塞のため国立大竹病院において急逝したのである。二階堂市長は、5月20日午後市役所で行われた広島・岩国大竹間国道対策特別委員会へ出席され、普段と変わらない様子だったが、休憩に入った直後、市長室で倒れ、午後3時15分国立大竹病院へ緊急入院、午後9時5分帰らぬ人となったのである（行年71歳）。二階堂市長は昭和29



文化会館で開催された総合計画審議会



市制施行20周年祝賀会が市体育館で行われた

（1954）年10月、市民の期待を担って初代の大竹市長に就任、以来20年にわたって、大竹市の発展の基礎を築くため全力で市政を担当してきた方であった。そしてあと133日で市長就任5期目を満了するはずであった。

市葬は、5月30日、大竹市体育館（大竹小学校の隣にあった）で執り行われた。その後、6月30日に市長選挙が行われ、神尾徹生氏が初当選し、2代目の市長となった。これ以後市長選挙は5月末〜6月にかけて行われることとなったのである。

余談になるが、最初の市制施行記念式典は市が誕生した昭和29（1954）年9月1日ではなく、翌年の昭和30（1955）年5月3日であった。そして10周年の記念式典は昭和39（1964）年11月1日に行われ

折からの強風にあおられてしまい、つり下げ後30分足らずで巨大鶴は破れてしまったのである。はかない鶴の一生であった。

そのほかステージではダンスや舞踊が披露され、カラオケ大会もあり、ハワイ旅行をかけた大ウルトラクイズではすべての問題が、大竹に関する問題だった。

ミニSL、ミニゴーカート、ミニ四駆レース、サラブレッド乗馬、アニメシアターなど、「こども遊遊ランド」は、会場を訪れた子どもたちにとって一日だけの遊園地だった。さらに55店舗が出店した「わくわくバザール」は、終始盛況で、会場を訪れた4万5千人の憩いの場としての役割を十分果たした。

圧巻だったのは「シンボリック協賛イベント」部会が担った、ヘリコプターの遊覧飛行(有料)、スカイ・スタント・カイト・ショー、豪華クルーザー、モーターボートの体験航海などであった。二度と行われぬような盛りだくさんのアトラクションは来場客を喜ばせた。

また、70cm×2000mと90cm×1200mの2種類のロール紙を、出来上がったばかりの道路(現在の小方港からゆめタウン方面への広い道路)に広げ、「ちびっ子ウルトラ絵描き大会」が子どもたち667名の参加で行われた。これは「紙」を

第8回 史上空前のイベント

エキサイティング ウェーブ イン オオタケ 『EXCITING WAVE IN OTAKE '89』 「みんな起きろ!」でマラソンイベント

昭和の末期、市内の大企業が倒産、撤退。大きな衝撃をまちに与えました。そんな中、まちを元気にしようと市民が立ち上がり、24時間の大規模イベントが開催されました。

大竹のシンボルとしてとらえ、シンボルの「紙」に子どもたちの夢ある作品が絵巻物のごとく描かれた。

フィナーレは神尾徹生市長(神尾氏は翌平成2年に退任した)を中心に「We Are The World」を会場全体で熱唱、大いに盛り上がったのである。



ギネス登録を目指したジャンボ折り鶴。



(上右) 100人のテープカットで開会(上左)「真夜中のシンポジウム」はテレビで深夜生中継された(左)フィナーレは「ウィ・アー・ザ・ワールド」の大合唱。

他人まかせで町おこしはできない
昭和時代が終焉し、新しく平成時代がスタートした年に、郷土大竹市では、行政主導ではなく、市民主導型の全市挙げての大きなイベントが行われたのである。そして、その後このような壮大なイベントは開催されていない。

イベント終了直後の平成元(1989)年9月19日の中国新聞の朝刊「天風録」には次のように記されている。

「合言葉『みんな起きろ』は街の元気回復を担ったものである。無論、市民にとっては初の経験だ。夕方五時から翌日のその時刻まで、催しの長距離リレー。完走をかけて二十歳代から四十歳代までの「元気印」の男女が準備に奔走。悩める地方小都市の再生を信じて、おカネを集め、知恵を絞って、当日は汗を流した。市も応援の旗を振った。『中略』催しへの参加のべ4万5千人は市の人口をしのいだ。潜在エネルギーは実証された。多少の試行錯誤はあっても、志ある市民が力を合わせた過程は尊い。教訓―他人まかせで町おこしはできない。」

※「We Are The World」

1985年にアメリカで発売された歌で、有名なアーティストが「USAフォー・アフリカ」として集結して完成させた。



平成がスタートした平成元（1989）年に、大竹市では史上空前、そしてもう二度とできないような大きなイベントが開催されている。「みんな起きろ！」をキャッチフレーズに、小方沖海面埋立事業により誕生した広大な土地（現在の晴海地区のうち、晴海臨海公園やコメリ、トライアルがある地域を除いたエリア）で、9月16日の午後5時から翌17日の午後5時までの24時間ぶっ通しで開催されたマラソンイベントである。

まちの元氣を取り戻したい

このイベントが企画された時代背景を知るには、昭和の後半までさかのぼらなければならない。念願の市庁舎が小方に完成した昭和55（1980）年、地元企業で最大だった大竹紙業が過剰な設備投資が原因で約320億円の負債を抱えて倒産した。これは石油化学コンビナートを中心に広島県西部の企業城下町として発展してきた市に激震が走る出来事であった。

その後、会社更生法の手続きを経て、倒産以来14カ月ぶりとなる昭和57（1982）年2月から上質紙などの生産を一部再開し、大竹紙業問題が一息ついたころ、同年11月18日の日本経済新聞のトップ記事で「三井東圧化学大竹工業所が閉鎖か？」という衝撃的なニュースが、再び企業城下町を駆け巡ったのである。この三井東圧化学大竹工業所撤退問題は、国内石油化学工業の再編が絡んだ大きな問題であり、大竹市は経済的に大きな影響を受けた。大竹市の昭和時代の終焉は、昭和50年ごろから続く人口減少の加速化が進み、まさに活気がなくなり始めていた時代であった。

こうした中、昭和57（1982）年2月から着工した「小方沖海面埋立事業」の大竹市部分約11万㎡（マツダスタジアムおよそ2個分）の新

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年11月号掲載

たな土地が誕生したのである。大竹商工会議所青年部では、この広大な埋め立て地で住宅地をはじめとした開発が始まる前（平成2年から住宅地の販売が予定されていた）のわずかな時間を利用して、沈滞ムードのまちに元氣を取り戻すきっかけを作れないかという議論が自然発生的に起きていた。

平成元（1989）年6月初め、30代から40代を中心とした商工会議所青年部や青年会議所、各労働組合、PTA連合会、ベンチャークラブなどの市内のさまざまな団体の代表が集まって、議論を重ね計画されたのが「EXCITING WAVE IN OTAKE '89」という一大イベントだったのである。

平成2（1990）年からは、一部が住宅地として販売開始が予定されており、年内にしかも寒くならないうちに開催しなくてはならないという制約もあり、開催日は9月16日（土）から17日（日）に決まった。開催まで3カ月しかないという過酷な条件を覚悟しての決定である。しかも実際に実行委員会が立ち上げられたのは7月初めであったので、開催までの時間は2カ月余りしかなく、市も、企業も、各種団体も含め市民全員で、大きなイベントの開催・成功に向けて一丸となって準備を進めていったのである。

4万5千人が来場！ 史上空前のイベント

運営組織は、「総務」、「メインステージ」、「ワクワクバザール」、「こども遊遊ランド」、「シンポリック・協賛イベント」の5つの部会からなっており、ボランティアスタッフの登録者数は総勢1111人、イベントポスターのデザインをプリントしたTシャツを着て運営に携わった。

「メインステージ」では、当時人気絶頂だった歌手本田美奈子（故人）のステージが19時30分から21時まで繰り広げられ、1万人を超える観客によるバリケードを破らんばかりの熱気が会場を包んだ。その後、花火やビンゴ大会、オークションが行われ、9月17日午前3時30分からは「真夜中のシンポジウム21世紀の大竹を語る」が午前6時まで開催され議論が交わされた。午前6時からは「ギネスに挑戦！ジャンボ折り鶴」が行われた。ロール紙をカットして貼り合わせ30m×15mの2枚の紙を作り、200人で重さ600kgの折り鶴を4時間かけて作り、消防自動車とクレーン車を使ってつり下げられた。羽の下には、建設現場で使われる足場が組み立てられていて、羽を支えていた。空に羽ばたいている巨大な純白の折り鶴の姿は壮観であった。ところが、突然の不幸が訪れる。

弥栄湖スポーツフェスティバル

『弥栄湖スポーツフェスティバル』は、全国のダム所在市町村が、ダムとその周辺を活用したスポーツ・イベントなどを通じて連携し、地域の活性化を図るために、平成3（1991）年から始まった全国初のダムウォータースポーツを楽しむイベントだった。

平成3（1991）年8月10日、11日と2日間、弥栄湖周辺（大竹会場と美和会場）でボート、カヌー、マウンテンバイク、ドラゴンボート大会などのスポーツ競技、「ダム湖の活用と地域づくり」をテーマとしたシンポジウム、人気アイドルグループの忍者、演歌歌手の尾形大作と金田たつえをゲストに迎えた野外コンサートやカラオケ大会、花火大会などがあった。大竹駅と会場を結ぶ臨時バスが30分間隔で運行され、多くの市民が楽しんだ。

平成4（1992）年からは、終日のイベントとなり、湖水ではドラゴンボート大会、シーカヤック体験教室、水上バイクショーなどのスポーツ競技が、湖畔のイベント会場ではキャラクターショー、カラオケ大会などのアトラクションやゲームなどが行われ、多くの人でにぎわった。午後8時からは湖面を彩る花火でフィナーレを飾るなど毎年、弥栄湖周辺で行われる定番のイベントとなっていた。

第9回 弥栄ダムと 弥栄湖スポーツフェスティバル

大竹市の発展の源となった小瀬川。しかし、それは度重なる洪水との戦いの歴史でもありました。治水や都市用水供給のため建設されたダムを舞台にしたイベントを紹介します。

森と湖 弥栄湖フェスタ

また、平成14（2002）年7月27日、28日には『森と湖に親しむつどい』として、『森と湖 弥栄湖フェスタ』が開催された。『森と湖に親しむつどい』とは、国民が森林や湖に親しむことにより、心身をリフレッシュしながら、森林やダムなどの持つ自然豊かな空間や社会



（上）弥栄湖スポーツフェスティバル
（中）マウンテンバイク（下）ドラゴンボート（左）人気アイドルグループ『忍者』のコンサート

生活に果たしている役割について、理解を深めることを目的として、昭和62（1987）年度から国土交通省および林野庁が毎年7月21日から31日までを「森と湖に親しむ旬間」として定め、この旬間で、全国の管理ダムを中心に、ダム見学会などのイベントが行われる全国行事である。『弥栄湖スポーツフェスティバル』がスタートして9年目となる平成10（1998）年からは、少しマンネリ化してきたイベントの内容を刷新し、パークゴルフとブラックバス釣りのトーナメント、ミックス・ダブルステニス大会が新しく加えられた。しかし、その後ナックルフォア（ボート競技）などのスポーツ競技が、

一般にはなじみが薄く、次第に来場者が減少してきたことを受け、実行委員会内部でも費用対効果が議論されるなど、財政的に厳しい時代となってきた。そして平成19（2007）年に、『弥栄湖スポーツフェスティバル』はついに廃止となったのである。翌年からは岩国市美和町を主な会場にして、新しく『弥栄湖サマーピクニック』としてイベントが運営されたが、平成22（2010）年をもって廃止された。

小瀬川の治水の歴史

弥栄ダムのある小瀬川は、流域面積342km²、長さ59kmの河川で、その水源を冠山（1339m）・羅漢山（1109m）などの一連の中国山地に発し、いくつかの小さな支川を合わせながら2、3の小盆地を流れ、中流部にて広島・山口県境を南下し、支川の玖島川を合わせて蛇喰（じやく）磐・弥栄峡を形成し、弥栄において流路を東方に転じ、蛇行しながら、佐伯町（現廿日市市）、大野町（現廿日市市）、山口県的美和町（現岩国市）、岩国市、和木町、大竹市の2市4町（現3市1町）にわたる。

この川は洪水による災害が多く、古くから記録に残されている。特に江戸時代の安永、天保年間の被害は甚大であった。また、近年では明治17年、36年、37年、昭和3年、5年、16年、20年、25年、26年と相次いで大洪水に見舞われている。したがって、小瀬川の治水事業は江戸時代から広島・岩国両藩によって少しずつ行われてきた。また明治以降も広島・山口両県によって部分的に行われてきた。ところが、第二次世界大戦後の相次ぐ大水害、特に昭和26（1951）年10月のルース台風による洪水は、小瀬川流域の町村に大きな被害をもたらしたのである。このため、昭和39（1964）年、上流に洪水

調節の機能を持つ多目的ダムとして、小瀬川ダムが建設された。しかしルース台風による被害や、昭和47（1972）年7月にあった豪雨災害の状況からみても、小瀬川ダムだけでは洪水調節を行うには十分でなく、抜本的対策を講ずる必要が出てきたのも事実であった。

弥栄ダム建設の理由

小瀬川流域では、上中流部では主として農林業が営まれているが、下流部の大竹・和木・岩国周辺には、戦前より化学・製紙などの工場が立地し、戦後は石油関連工場が多く進出、一躍石油化学工業地帯へと発展してきた。これらの工業地帯への電力供給のため、支川の玖島川に水力発電専用の渡ノ瀬ダムが造られ、これを含む流域内の3発電所および流域外の1発電所において最大出力2万8740kWの発電も行

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2024(令和6)年12月号掲載



われていた。このように小瀬川は、流域およびその周辺地域の社会、経済、文化の発展に大きく寄与していたが、将来の洪水の惨禍を排除することはもとより、都市用水の需要増大に対処するためにも、小瀬川の総合的な開発は緊急を要するとされ、弥栄ダムの建設が計画されることになったのである。

弥栄ダムは昭和46（1971）年4月に調査事務所が開設されてから20年の歳月と約1100億円の事業費をもって平成2（1990）年10月18日に竣工式を迎えた。このダムは、小瀬川の洪水調節および広島・山口両県の水需要に応えるため、堤高120m、堤体積155万m³、貯水量1億1200万m³と重力式コンクリートダムとしては、完成当時西日本随一の規模を誇ったダムであり、

東は広島市佐伯区、西は山口県熊毛郡、大島郡と広範囲に及んで上水道や工業用水として利用されている。

なぜ河川名が「小瀬川」に？

ところで、安芸と周防の国境は、古くから洪水などで川の流れが変わるたびに、紛争を繰り返してきたが、享保2（1802）年広島・岩国両藩の努力により、幾筋かに分かれて流れていた小瀬川を掘り割って一筋の川とし、そこに国境を画定させた。現在の小瀬川はほぼこの時の姿をとどめている。

また河川名については、広島藩では大竹川または木野川と呼び、岩国藩では小瀬川と別々に呼んでいた長い歴史があった。しかし、昭和43（1968）年に1級河川に指定され、下流部が国直轄で管理されることになる、これを機に河川名も統一されると、この名称は河口に向かって右岸の地名を当てる」という国の行政上の原則に従って「小瀬川」の名称が採用された。その後建設省（現国土交通省）が木野地区内に「1級河川小瀬川」の看板設置を試みたが、木野地区住民が「木野川になるのなら喜んで土地を提供するが」と拒否したとの逸話もある。慣れ親しんだ「木野川」の名前にならなかった悔しさが伝わる話である。

史上初の国際大会の開催に向け、全市挙げての推進体制を整えたのである。平成4（1992）年から平成5（1993）年にかけて、大会への機運の醸成を図るために、大竹駅前、市役所前、国道2号沿い、総合市民会館、広島岩国道路大竹IC、玖波駅前などに広告塔を設置し、市内の公園へバスケットボールゴールポストを設置するなど、PRに努めていった。

平成3（1991）年、本格的なリハーサル大会として「第25回日本リーグ大竹大会」を誘致し、平成3（1991）年11月24日に総合体育館で実施した。後日「選手控室」とした体育館南側の指導員室は狭く、またアリーナフロアの傷みもかなりひどいため、張り替えまたは研磨が必要」などの要望がHAGOCから大竹市に出された。

体育館では昭和55（1980）年の開館以来、毎年11月開催の産業祭に利用されており、体育館の通常利用は「土足厳禁」だが、年に1回の産業祭では薄いゴムシートを1枚敷き詰めただけで土足のまま会場への出入りを認めていた。フロアの傷の大半は、土足のまま利用したため、一点に圧力のかかる女性のピンヒールによってできたへこみや靴に付着した小さな砂などによってできた傷であった。

第10回 大竹がバスケットで沸いた 広島アジア競技大会

平成6年、広島で開催されたアジア競技大会。市を挙げて取り組んだ世界規模の大会が大竹市を舞台に行われました。



総合市民会館
のメモリアル
モニュメント。

平成4（1992）年、体育館の東側の倉庫部分を改築して控室4室を新たに増設、アリーナの研磨工事、館内トイレの洋式化、アリーナ照明設備のレベルアップ（700ルクスを1500ルクス程度に）などをおよそ2億円かけて実施、ハード面の整備を終えた。



日本対中国の熱戦に沸く総合体育館。



大会マスコットキャラクターのポッポとクックは、盛り上げにひと役買いました。

熱戦が繰り広げられた広島大会

大会は、平成6（1994）年10月3日から15日の12日間（10月11日は休日）にわたって行われ、大竹会場では、10月3日から10日までの8日間の予選リーグが行なわれた。10月13日には広島経済大学石田記念体育館で女子決勝が行われ、77対76の1点差で大韓民国が金メダルに輝き、日本は惜しくも銀メダルに終

わった。また、男子決勝は10月15日に同体育館で行われ、100対72で中華人民共和国が大韓民国を破って金メダルに輝いた。日本男子は、準決勝で大韓民国と対戦、101対63で敗れたが、フィリピンとの3位決定戦で、わずか3点差で勝利し銅メダルを獲得している。

「第12回アジア競技大会広島1994」は、旧ソ連の中央アジア地域の国々からの参加や、内戦の影響で国際スポーツ大会から遠ざかっていたカンボジアの参加が認められた大会で、42の国と地域から6826人の選手・役員が参加し、34競技・337種目に熱戦を繰り広げた大会だった。大会期間中の観客は、組織委員会が目標とした110万人を超え、111万8591人にのぼった。（総合体育館における観客数は延べ6048人）

大会終了後、広島開催の意義と県民、市民挙げての協力、支援により大会が成功のうちに終わったことを後世に伝えるとともに、今後のスポーツ振興やボランティア意識の向上に資するため、HAGOCは、競技の行われた各会場（施設）に、アジア競技大会メモリアルモニュメントを設置した。このモニュメントは20年の時を経た今でも、総合市民会館の正面玄関に向かって左側のスロープの前にたたずんでいる。

アジア競技大会を広島に

アジア競技大会は、インドの故ネーデル首相の提唱により、昭和23（1948）年7月のロンドンオリンピックに参加していたアジア6カ国（インド、フィリピン、朝鮮、中華民国、セロン、ビルマ）の代表が、競技大会を4年ごとに開催することで一致し、翌年ニューデリーの会合で、アジア競技連盟が創立されて始まった国際的なスポーツ大会である。第1回アジア競技大会が昭和26（1951）年3月インドのニューデリーで行われたのを始まりとして、以後オリンピック大会の中間年に開催されており、昭和33（1958）年5月には、第3回大会が、昭和39（1964）年の東京オリンピック招致活動中の東京で開催されている。

アジア競技大会の広島招致は、昭和53（1978）年広島市体育協会会長が、当時の荒木広島市長に国際的スポーツ大会の招致を要請した時から始まる。

昭和57（1982）年に、広島市から県内市町に対して広島大会構想策定作業の一環として、大会での利用可能な体育施設についての調査依頼があった。

各競技の候補会場はまず、競技場および選手控室などの整備状況と、駐車場、道路、交通条件、および不

足施設を整備するための空き地の有無など施設周辺の状況調査が行われた。次に、各競技の競技場規格、練習場や競技関連施設の規模、運営関連施設の規模、駐車場の駐車台数を条件に選考された。

第三次選考まで残った大竹市総合体育館は、選手、役員控室などが現状の施設でほぼ対応可能として、昭和58（1983）年3月25日にバスケットボール予選会場に決定された。

昭和59（1984）年2月、「昭和65年第11回アジア競技大会の広島招致」について閣議決定が行われ、日本オリンピック委員会の決定を受け、広島市は正式に開催地として名乗りを上げる。ところが、同大会については中華人民共和国の北京市も開催を希望し、広島市と競合することになったのである。どちらも譲らず、

アジアオリンピック評議会（OCA）はなかなか正式決定できなかった。

第12回大会が広島に決定

そして、昭和59（1984）年9月、アジア競技大会招致をめぐる両市の競合は、大韓民国のソウルで開催されたアジアオリンピック評議会（OCA）総会に舞台を移した。北京市は中華人民共和国の首都であり、第1回目のニューデリーから第10回のソウルまで、どの大会も首都での開催であった。しかも中華人民共和国での開催は初めてである。一方、地方都市ながら、廃墟からの復興と国際平和の拠点を目指す広島市の姿勢をOCAは高く評価しており、どちらで開催するかなかなか決められなかった。そうした中、仲裁に入ったOCA会長から前代未聞の案が提案される。それが「2大会の開催場所をセットで開催決定」だった。この案が採用されたことによって、北京が昭和65（1990）年の第11回大会、広島が昭和69（1994）年第12回大会開催と決定されたのである。2大会決定は過去に例をみない英断であり、また地方都市開催はアジア競技大会初であった。

この決定から2年後となる昭和61（1986）年、広島市アジア競技大会対策室から「昭和58年ごろ、大竹市がバスケットボール会場という

話もあったが、会場についてはいったん白紙に戻した。今後は組織委員会が設置され、会場について改めて検討される。会場誘致は、早く名乗りを上げた方が有利になるので、会場誘致の希望があれば、『アジア競技大会会場開催要望書』を提出してほしい」と言ってきた。

市は、大会開催が予定されている昭和69（1994）年が市制施行40周年に当たることから、会場を総合体育館とし、以前検討された卓球、バドミントン、バスケットボール、柔道、ボクシング、バレーボールのいずれか1競技の開催誘致を要望した。そして昭和62（1987）年4月1日、財団法人広島アジア競技大会組織委員会（通称HAGOC）が発足、平成元（1989）年4月6日、バスケットボールの予選会場として、大竹市総合体育館が正式決定された。

予選会場とされたのは、総合体育館の入場観客数が1100人程度であり、3000人以上を予定している決勝戦を行うには不足することが理由であった。

全市挙げて大会推進

平成3（1991）年6月22日には、「広島アジア競技大会大竹市推進協議会」（会長…大竹商工会議所陣場寛会頭）を発足させた。市の歴

市制施行70周年連載企画

振り返る
70年

2025(令和7)年1月号掲載

い力の入れようだった。まさに、民泊を受け入れた自治会や家庭もみんなが国体に参加しているつもりになった、心からの歓迎だったのである。

さらに、各都道府県の監督・選手たちは試合当日、会場の総合体育館で感動の光景を目にする。民泊家庭の家族はもちろん、自治会挙げて会場に陣取り、民泊を引き受けた他県の選手を精いっぱい応援したのである。まるで、各県から試合会場に応援にやってきたサポーターのように、横断幕を掲げて一生懸命の応援合戦を繰り広げたのである。

感謝の便り続々と

後に国体に参加した多くの監督や選手たちから「私たちが到着するなり歓迎の宴、そして毎日早朝からの朝食作りや夕食の準備、いろいろな手間がかかった変化のあるお献立、そのご苦労を感じつつ甘えさせていただきました。またベスト8に入れば、お祝いだとタイの造りやヒラメの刺身など、豪華なごちそうに自治会の皆さまにただただ感謝するばかりでした。一方連日の応援、しかも準々決勝では、地元広島が相手であるにもかかわらず、我がチームに躍りになって応援していただいた、そのご好意が痛いほど心にしました。本当に幸せな一週間でありました」

「大竹市民のフェアプレイ（応援）」

第11回 民泊でおもてなし 「ひろしま国体」

大竹市で開催される国民体育大会。しかし全国からの選手団を受け入れる宿泊施設がなく、この難局を乗り切るために各地区・各家庭での民泊を実施。これが思わぬ効果を生み、各地の選手は自分たちの選手とばかりに応援に熱が入りました。



(上)大会後「民泊の思い出集」を発行。監督・選手からの便りや受け入れ自治会の感想を掲載(下)大竹駅に青森県選手団を出迎えた西栄1丁目自治会。



(上右)民泊家庭の料理講習会(上左)選手と一緒に大竹音頭を踊った本町2丁目(下右)滋賀県選手を激励する元町2丁目(下左)民泊受け入れ選手団を各自治会が応援。

に感動しました。どこの国体でも感じるのですが、地元選手に対する大声援にうんざりしておりましたが、今大会における大竹市民は、公平、平等に応援されていたと思います。ボランティア活動が盛んとお聞きしました。大竹市民の良識に感動しました」

「リラックスして試合に臨めた。家族みたいで、一生心に残ると少女女子の選手たちが話したように、選手たちには忘れられない感激となった。これまで何度か「民泊」したことがあるが、こんなに熱烈なのは初めて」と感謝の手紙が届いた。

思い起こせばかつて、終戦によって海外から大竹港に引き揚げてきた41万人の人々は、ほとんどがやつれ衰えて実に痛ましい限りであったが、大竹の人たちはそんな引き揚げ者を心から歓迎し、精いっぱいのおもてなしでこれまでの労苦をねぎらったという歴史がある。わずか数日のおもてなしであり、しかも随分昔のことであるにもかかわらず、その心配りを忘れられないという引き揚げ者やその家族の方が、平成の初めごろにも、大竹を訪れることがあった。「ひろしま国体」で大竹を訪れた選手たちは、もしかしたらあの時のおもてなしと同じ心配りを味わったのかもしれない。



コンパニオンと一緒に大会
マスコットキャラクターの
咲ちゃん登場。

はじめての国体

平成時代は、市の歴史上でも、経験したことのないような大きなイベントや、50年に一度の開催のようなイベントが相次いだ時代だった。その中で、忘れることのできないイベントが平成8（1996）年にあった。ひろしま国体である。

ひろしま国体開催までの道のりは、昭和の時代から始まっている。広島県は昭和59（1984）年3月に、第51回国民体育大会の誘致を決定、昭和60（1985）年9月には文部大臣に対し、誘致に関する要望書を提出し、昭和63（1988）年3月に承認されたことで開催が決まった。そして平成元（1989）年5月に、大竹市で卓球競技と山岳（登山）競技が行われることが決定した。前回、広島県で国民体育大会が開催されたのは昭和26（1951）年の第6回大会のことであったが、このとき大竹市域では競技は行われなかったため、市にとってはまさに初めての国体開催であった。

市制施行70周年連載企画

振り返る 70年

2025(令和7)年2月号掲載

平成4（1992）年、県準備委員会は、国体のテーマとスローガンを広く募集した結果、テーマを「ひろしま国体」「スローガンを「いのちいっぱい、咲きんさい！」に決定した。

マスコットキャラクター「咲ちゃん」

後に「咲ちゃん」の愛称で多くの人に愛されたマスコットキャラクターは、デザインを公募して決定し、愛称も一般公募、応募総数1万4580点の中から「咲ちゃん」に決定した。大会スローガンの「いのちいっぱい、咲きんさい！」から名付けられたそうである。また「咲ちゃん」の頭の上にもみじが乗っているが、これは大会スローガンがイメージされるようにと、広島県の木である「もみじ」が重なり合っているデザインとなっている。さらに胸の「H」は「広島」の頭文字でもあり、おもてなし

の心を意味する「ホスピタリティ」の「H」でもある。

民泊の受け入れ

ひろしま国体の開催に向け準備を進める中で、大きな課題となっていたのが、選手たちの宿泊場所の確保であった。山岳競技の選手・監督を含む大会関係者については、山岳競技会場連合実行委員会を構成する2町1村（※佐伯町、湯来町、吉和村）で受け入れてもらうことで対応できたが、市内には宿泊施設が少なく、かつ収容能力もかなり低かったため、全国から131チーム、524人の卓球競技の選手・監督たちの宿泊場所を確保できそうになかったのである。

この難題に対し、平成5（1993）年7月27日に設立された市実行委員会が協議を重ねた結果、思い切って一般家庭を宿舎とする「民泊」を選んだ。さっそく平成6（1994）年10月の市広報で受け入れ家庭の募集を行ったものの、18軒の申し込みがなく、まだ100軒以上が不足していた。さらなる協力を市民にお願いするとともに、各自治会にも協力を求めた結果、最終的には124軒の受け入れ先を確保し大会を迎えることができた。他の競技会場となった市町村のなかにも「民泊」を選んだところはあったが、多くは



三倉岳県立自然公園内に設置された人工登はん壁で行われた山岳競技。

感動の民泊と心温まる応援

この一般家庭での民泊が、大会では思わぬ結果を生む。民泊受け入れ先の家庭が、まるで選手を家族のように温かく迎えたのはもちろんだが、その家庭が所属する自治会挙げでの心温まる歓迎ぶりに選手たちは驚いた。今まで幾度も国体に出たことがある彼らでも、自治会からこれほどの熱烈的な歓迎を受けたのは生まれて初めてだったのである。民泊受け入れ家庭や市内45自治会では、大会本番の数カ月前から宿泊受け入れに向けて献立講習会、食品衛生の講習会を受けるなど、準備に余念がな

和紙のまちで川柳大会

平成12(2000)年11月4日大竹会館アゼリアホールで文芸祭(川柳大会)が開催された。全国および海外から川柳作品を募集・審査し、入賞作品などを発表・表彰するとともに、当日投句や選評などを行い、川柳愛好者が交流し、文芸の真髄を広島から発信した大会となった。

当日は秋晴れのなか、当日投句の締め切り間際まで受付は参加者であふれ、会場は超満員の状態での開会となった。前年から新設された「小学生の部」では、前年を大きく上回る約2万句もの応募があり、未来へ大きな期待が膨らんだ。また、昼食休憩時間を利用して、会場前広場で地元特産品の物産展を開催し、多くの参加者でにぎわった。特に、和紙で栄えた町であった大竹市として、和紙の紹介に力を入れ、「和紙こいのぼり」の製作実演の前では、多くの参加者とその伝統技術に見入っていた。午後からのアトラクションでは、大竹少年少女紙太鼓アンサンブルチームによる和紙で作った太鼓の熱演があり、「和紙のまち大竹」を大きくアピールできた大会となったのである。

大竹少年少女紙太鼓アンサンブルチーム

昭和59(1984)年に大竹市青少年育成市民会議が立ち上げた、大竹市特産の手すき和紙を張った5種類の「紙太鼓」の演奏をする小・中学生のチームが始まりである。穂仁成元(1989)年からは、穂仁成元小学校で取り組み、市内でも人気が続けるなど、市内でも人気のチームだった。

第12回 西暦2000年にあった「文化の国体」国民文化祭

ビッグイベントが続いた20世紀の最後を飾るイベントで、まちに文化の華が大きく開いた国民文化祭が開催されました。

観客を魅了したジャズダンス

一方、11月5日に総合体育館で開催されたジャズダンスフェスティバル



(上) 紙太鼓アンサンブルチームの熱演(下) 全国から寄せられた川柳投句の山。



(上) 開催告知の広報おたけ平成12年10月号(下) 前年のプレ大会のジャズダンスフェスティバル。

ルでは、往復はがきによる鑑賞券の応募が予想をはるかに上回り、開場2時間半前から観客およそ1000人が列をなして開場を待つような状況であった。

オープニングは、オーディションにより選出された広島県内ダンサーと当時東京で活躍中の広島県出身ダンサーたちによる創作作品「広場へのパレード」で幕を開けた。続いて

全国各地から集まったジャズダンス愛好家による、すばらしいダンスが繰り広げられ、スローテンポの群舞や激しいヒップホップダンスなど、個性を生かしたステージは、満場の観客を魅了した。

また、平和の祈りを込め「ヒロシマレクイエム」というオリジナル作品を、国内外で活躍するプロダンサーに、オーディションで選ばれた広島県内ダンサー13人を加えた32人が、原爆投下の廃墟から立ち上がる人々をダンスで表現した。さらに「灯ろう流し」のシーンでは、地元大竹市内を中心にした50人の中学生が灯ろうを持ち、暗闇の中、川面を流れる灯ろうを幻想的に再現し、感動のステージが満場の観客の心にいつまでも残った。

後日談であるが、文芸祭(川柳大会)において、当市ゆかりの「和紙」という題で、和紙の持つ神秘的なすごさをもとに表現している句と選者から絶賛され、文部大臣奨励賞を受賞した「実印を押しても和紙は妥協せず」という句を刻んだ記念碑が会場になった大竹会館アゼリアホール駐車場の一角に建立されている。この記念碑は個人の顕彰碑的なものとしてではなく、大会の開催記念碑として建立したので、あえて作者の名前は入っていない。

国民文化祭の始まり

国民文化祭とは、音楽、演劇、伝統芸能、舞踊、文芸、美術、生活文化などさまざまな文化活動の成果を全国的な規模で発表し交流する総合的な文化の祭典である。「文化の国体」とも言われている。昭和52(1977)年から始まった全国高等学校総合文化祭に對抗し、一般の団体でも全国規模で参加する文化祭をしようと、当時の文化庁長官で作家の三浦朱門氏(故人)が提唱し、文化庁と東京都の共催で昭和61(1986)年にNHKホールで第1回大会が行われたのが始まりであり、以後毎年各県の持ち回りで開催されている。平成12(2000)年の広島県での国民文化祭は第15回という節目の大会にあたり、中国地方で初めての開催であった。

「川柳」と「ジャズダンス」に決定

本市では、平成12(2000)年秋に開催予定の「第15回国民文化祭ひろしま2000の基本構想」について、平成9(1997)年1月に県から照会があった。このとき市教育委員会は、文芸(短歌、俳句、川柳、現代詩など)であれば対応可能と回答している。

続く、実施事業についての開催希望の照会でも、第1希望「川柳」、第

2希望「短歌」で回答しており、市は「川柳」または「短歌」であれば、市内に活動している文化団体もあり、開催は可能であると考えていた。

ところが、県文化振興室長から「できれば大竹市には「川柳」と「ジャズダンス」2種類の開催を引き受けてもらえないか」と打診されたのである。市としては、「川柳」は希望した種目であり、引き受け可能であるが、「ジャズダンス」は、会場にできるようなホールもなく、運営も不安があることから引き受けにくい種目であった。しかし、大会の諸事情を考えると「決定されれば、引き受ける」と約束することもやむを得なかった。

その後、市内にも小・中・高校生を中心にしたジャズダンスの同好会などがあることが判明、また、会場については県の補助金などを財源に

総合体育館を臨時のホールに仮設することにした。こうして文芸祭「川柳」と洋舞「ジャズダンスフェスティバル」の開催が大竹市に決定されたのである。

元祖ゆるキャラ「ブンカッキー」

平成10(1998)年3月に、国民文化祭が「広がる生命(いのち)輝く未来」をテーマに県内各地で平成12(2000)年11月3日～12日の10日間で開催されることに決定した。さらに文化の指揮者をイメージし、秋に色づく美しい「モミジ」、瀬戸内海の新鮮な「カキ」、広島県の頭文字「ひ」を表しているデザインとなっているマスコットキャラクターが、全国公募を行って選定された。

また愛称「ブンカッキー」は、マスコットキャラクターのモチーフとなった「カキ」と「文化」を組み合わせ、明るく活気のある文化祭となるよう願いを込めて名付けられた。余談であるが、この「ブンカッキー」から「ゆるキャラ」という概念が生まれている。

本番に向けてプレ大会開催

予行演習も兼ねたプレ大会として、平成11(1999)年10月17日、第9回県民文化祭文芸祭(川柳大会)が大竹会館アゼリアホールで行われた。事前投句に885人の方から、

ブンカッキーと立戸保育所の子どもたち。



6939句の応募があり、また当日投句には203人が参加し、812句の応募があった。さらに「子ども川柳」では485句の応募があった。これは新聞社への働きかけやラジオ出演、県内の句会へ参加するなどの広報活動を積極的に展開したことが功を奏し、結果につながったのである。また、大会当日は、開会までの時間を地元文化協会による「茶席」と「邦楽演奏」で歓迎し、大好評であった。

一方、ジャズダンスフェスティバルのプレ大会として、同年11月7日、第9回県民文化祭ジャズダンスフェスティバルが総合体育館で行われ、県内の11チームが出場、市民らおよそ1100人の観客は躍動感あふれるステージを楽しんだ。

また、平成12(2000)年5月には、ジャズダンス1日体験講座「親子でたのしむはじめてのジャズダンス」「男性のためのはじめてのヒップホップダンス」が開催されている。当時は、ジャズダンスとエアロビクスの区別がつかない方も多く、少しでも多くの市民にジャズダンスの楽しさを知ってもらおうと企画された講座だった。

市制施行70周年連載企画

振り返る
70年

2025(令和7)年3月号掲載

大竹市70年のあゆみ

昭和29(1954) 年

9月 大竹市制施行

10月 初代市長に二階堂哲朗氏が就任

写真1 小方小学校で開催された市制施行祝賀会での写真。

写真2 玖波小学校で開催された市制施行祝賀会での写真。



昭和30(1955) 年

5月 市制施行祝賀式典（大竹高校講堂）および祝賀行事の開催（5/3～5/5）

5月 大竹市消防団結成

4月 小方中学校が、旧海軍潜水学校から小方町新町新開（現小方1丁目）へ移転

7月 阿多田島海水浴場の開設

7月 阿多田島から小方中学校への通学船「学友丸」の進水式

8月 第1回市議会議員選挙

写真3 「祝大竹市制」と書かれた看板が市役所（旧小方町役場）の杉でつくられた門に掛けてある。おそらく市制施行祝賀行事の一環で作られた門と思われる。またその門の右側には「新名所亀居城址公園入口」と書かれた案内表示も見える。

写真4 「阿多田島海水浴場」開設。当時は玖波港発小方港経由の5便と、岩国港からの7便があった。

写真5 阿多田島と小方港を結ぶ通学船「学友丸」が進水した。定員80名で27トンの木造船だった。



昭和31(1956) 年

3月 市社会福祉協議会の設立

4月 株式会社四国銀行を市金庫に指定

4月 中国電力玖波発電所の完成

昭和32(1957) 年

11月 大竹市郷土民謡「あゝ征長隊」「大竹音頭」（作詞：石本美由起）完成発表会開催

11月 原水爆禁止大竹市協議会の結成

12月 し尿処理船「大清丸」（18t）が竣工

写真6 三菱レイヨン株式会社大竹事業所養和会館で行われた「大竹音頭」と「あゝ征長隊」の完成発表会。



昭和33(1958)年

- 2月 国立大竹病院が旧海軍潜水学校から玖波町中浜（現玖波4丁目）へ移転
- 2月 三菱ボンネル株式会社広島工場（現三菱ケミカル株式会社広島事業所）誘致契約成立
- 4月 国民健康保険事業を全市に適用
- 8月 日本紙業株式会社大竹工場（現日本製紙株式会社大竹工場）誘致契約成立

写真7 「国立大竹病院」（現広島西医療センター）は、旧海軍潜水学校の建物を利用して烏帽子新開にあったが、三菱ボンネル（現三菱ケミカル株式会社広島事業所）の新工場誘致のため、玖波町中浜（現玖波4丁目）へ移転した。写真は落成式の写真である。



昭和34(1959)年

- 1月 玖波公民館（木造・スレート葺・2階建/延べ550㎡）オープン
- 5月 阿多田島簡易水道完成
- 11月 「大竹市史」の編さんに着手

写真8 阿多田島は、長年生活に必要な水に悩まされてきたが、簡易水道の完成で解消された。



昭和35(1960)年

- 7月 松ヶ原に養老施設「松寿園」完成（7/1事業開始）
- 8月 明治新開埋立完了
- 11月 公共下水道事業認可
- 11月 玖波町大人原に完成した1日11tを処理するゴミ焼却場が本格稼働

写真9 松ヶ原に完成した養老施設「松寿園」



昭和36(1961)年

- 6月 駐留軍接收地（現ダイセル株式会社第1工場及び日本製紙株式会社大竹工場敷地）の返還
- 9月 三井石油化学工業株式会社（現三井化学株式会社）、三井ポリケミカル株式会社（現三井・ダウ ポリケミカル株式会社）誘致契約成立
- 12月 三井化学工業株式会社（現三井化学株式会社）、大日本化成株式会社（現株式会社ダイセル）誘致契約成立

写真10 駐留軍接收地の返還式。この場所は返還後、日本紙業株式会社（現日本製紙株式会社）の工場敷地となった。



昭和37(1962)年

- 4月 和木村(現和木町)のし尿処理を受託
 4月 大竹保育所が現在地に完成し、保育をスタート
 9月 大竹中学校校舎・体育館が完成

- 写真11 旧海軍下士官集会所(現大竹中学校)の建物を利用していた「大竹保育所」は、現在地に移転新築した。
 写真12 企業誘致のため、旧大竹海兵団跡地にあった「大竹中学校」は現在地の白石に移転した。
 写真13 「大竹中学校」が白石に移転新築した時の記念写真。



昭和38(1963)年

- 3月 大竹電報電話局舎完成
 7月 市民プール完成
 11月 文化会館完成

- 写真14 「大竹電報電話局舎」完成。このときから市内の手動式電話はすべて自動式となった。現在1階は民間の福祉施設となっている。
 写真15 「市民プール」完成。このプールは日本水泳連盟公認プールでさまざまな水泳大会が行われた。
 写真16 「文化会館」が大竹町役場跡地に完成、以後講堂では講演会や演芸会などさまざまなイベントが開催された。



昭和39(1964)年

- 6月 小瀬川多目的ダムが完成
 7月 栄町と小島新開地区の住居表示を実施
 9月 オリンピック東京大会の聖火ランナー大竹市通過
 10月 山陽本線が全線電化
 11月 市制施行10周年記念行事の開催(1～3日)
 11月 文化会館隣地に消防庁舎完成

- 写真17 栄町中継所で山口県から引き継いだ東京オリンピックの聖火。大竹市役所前では多くの市民が小旗を振って歓迎した。
 写真18 山陽本線が完全電化され、特急「はと」号が大竹駅に停車することになった。
 写真19 11月1日 文化会館で開催された「市制施行10周年記念式典」を終えた後、祝賀会が予定されている大竹中学校体育館に向かう参加者。
 写真20 11月1日 市制施行10周年を記念して市内各所でパレードが行われた。写真は、13時に大和橋を出発し、大竹駅方面へ向かう途中の本町を行進中の大竹小学校鼓笛隊の市中パレードの様子である。
 写真21 文化会館の隣地に「消防署」が完成。1階の一部に大竹支所が設置された。この場所には現在「アゼリアおおたけ」がある。



昭和40(1965)年

- 1月 木野保育所、木野支所の移転新築工事完成
- 4月 消防署東分署を黒川地区に設置
- 7月 大竹小・中学校のプールがともに完成
- 7月 旧大竹町のうち鉄道以西地区の住居表示を実施
- 9月 大竹市体育館完成（大竹小学校体育館としても利用）

- 写真22 木野地区住民の念願だった「木野保育所」が完成した。二階堂市長をはじめ市議会議員の後ろには、築山をボランティアで造った多くの地域住民も一緒に写っている。
- 写真23 黒川地区（現在の大膳橋南詰交差点山側の元黒川薬局付近）に「消防署東分署」を設置した。
- 写真24 大竹中学校のプールが完成し、プール開きが行われた。
- 写真25 大竹小学校の講堂跡地に「大竹市体育館」が完成した。



昭和41(1966)年

- 2月 唐船浜団地造成事業（46,000㎡）完成
- 7月 立戸、御幸町、小方、御園、黒川地区の住居表示を実施
- 7月 木野小学校の校舎完成
- 8月 休日診療（当直医制）スタート

- 写真26 造成工事中の唐船浜団地（現玖波7丁目）。
- 写真27 「木野小学校校舎」完成。市内の小学校では初めての鉄筋コンクリート造りだった。この校舎は平成23(2011)年3月の閉校まで使用された。



昭和42(1967)年

- 1月 清掃センター（し尿処理場）運転開始
- 4月 玖波地区の住居表示を実施
- 4月 市の奨学金制度がスタート
- 4月 ゴミ収集をダストボックス方式に変更（S.42～3カ年計画）
- 5月 市営初の児童公園（上市児童公園）が元町4丁目薬師寺前に完成
- 5月 三井ポリケミカル株式会社大竹工場爆発事故
- 6月 市文化協会が発足

- 写真28 クレーン車で吊り上げられたダストボックスの下部を開いて、投入されたごみを収集していた。
- 写真29 市域で初の児童公園「上市児童公園」が元町4丁目薬師寺前に完成、子どもたちは遊び場ができて大喜びだった。



昭和43(1968) 年

- 1 月 広島市からスタートしていた「広島一大竹間
駅伝競走大会」を、第17回から新しく市内の
コースに変更して「大竹駅伝競走大会」とし
て開催
- 1 月 翠橋開通
- 4 月 「市民交通傷害保険」をスタート
- 4 月 「みどり児童公園」油見に開園
- 5 月 市内初の鉄鋼船「第8阿多田丸」就航
- 7 月 「憩いの森」に「青少年キャンプ場」オープ
ン
- 7 月 玖波中学校プール開き
- 7 月 全国高校総体相撲大会が市体育館で開催（7
/29、30）
- 9 月 1日30tのゴミを処理する焼却場が東栄3丁
目清掃センター内に完成
- 10月 玖波小学校の校舎が鉄筋コンクリート造に改
築
- 11月 第1回市産業祭開催

- 写真30 この年から「大竹駅伝」のコースを大竹市内に変更。玖波
グリーンアイランド前スタートになった。後方に唐船浜港
そばにあった松の大きな木が見える。
- 写真31 「翠橋」の渡り初め。「翠橋」の名称は二階堂市長命名で、
大気汚染の防止と町の美化を図ろうとする意図が込められ
ている。
- 写真32 油見地区の区画整理が完了した直後の「翠橋」周辺の写真。
- 写真33 市内で2番目の児童公園「みどり公園」完成。植木を寄贈
したライオンズクラブやボーイスカウト、ガールスカウト
の皆さんで植樹した。
- 写真34・35 市内初の鉄鋼船「第8阿多田丸」（192人乗りで73トン）
が「学友丸」に替わって就航した。
- 写真36 「憩いの森」に隣接した20アールの民有林を市が借り受け、
「青少年キャンプ場」がオープンした。
- 写真37 玖波中学校に玖波地区待望の学校水泳プールが完成、小学
校にプールができるまで小・中共同で使用された。
- 写真38 第1回「大竹市産業祭」が大竹中学校をメイン会場に行わ
れた。



30



31



32



33



34



35



36



37



38

昭和44(1969) 年

- 5 月 大竹小学校に市内初の留守家庭児童会「ひか
り子ども会」誕生
- 7 月 玖波小学校プール開き
- 12月 昭和43（1968）年2月に着工した海面埋立
工事（港町地区）竣工
- 12月 ダイセル株式会社大竹工場爆発事故

- 写真39 待ちに待ったプールが玖波小学校に完成した。
- 写真40 黒川沖海面埋立工事（現港町）は昭和44(1969)年に完成し
た。



39



40

昭和45(1970)年

- 4月 二葉保育所開所
- 4月 飯谷小学校が閉校し、穂仁原小学校飯谷分校となる
- 4月 市農業協同組合が発足
- 5月 ダイセル株式会社大竹工場爆発事故
- 8月 湯舟町住宅団地一般分譲開始
- 12月 新町1丁目～3丁目の一部、本町1、1丁目の一部、油見1丁目の一部の下水道の供用を開始

写真41・42 湯舟団地の分譲を開始。ここからの搬出で黒川沖の海面埋立（現港町）が行われた。

写真43 新町2丁目付近公共下水道工事。この地域は昭和45(1970)年12月に供用を開始した。



昭和46(1971)年

- 3月 栗谷町の三倉岳一帯499haが県立自然公園に指定
- 3月 暴力追放都市宣言
- 3月 東栄1丁目にさかえ公園完成
- 3月 栗谷小学校谷尻分校、広原分校閉校
- 5月 錦龍公園「憩いの森」完成
- 7月 木野小学校プール開き
- 7月 栗谷中学校プール（小・中共用）開き
- 8月 県、市は日本紙業(株)（現日本製紙(株)）と公害防止協定を締結
- 8月 阿多田小学校防音校舎完成
- 9月 県、市は三菱レイヨン株式会社（現三菱ケミカル株式会社）と公害防止協定を締結
- 11月 大竹商工会議所ビル完成
- 11月 県、市は三井東圧化学株式会社（現三井化学株式会社）、ダイセル化学株式会社（現ダイセル株式会社）、三井石油化学工業株式会社（現三井化学株式会社）、三井ポリケミカル株式会社（現三井・ダウ ポリケミカル株式会社）と公害防止協定を締結

写真44 都市計画事業の一環として整備された「さかえ公園」がオープンした。

写真45 木野小学校に待望のプールが完成した。

写真46 栗谷中学校プールが完成、川で泳いでいた子どもたちも安心して泳げることを喜んだ。

写真47 米軍機が発着するコースにあっていた阿多田小学校に防音校舎が完成した。

写真48 大竹商工会議所ビル新築。左の空地は現在アルクみどり橋店となっている。



昭和47(1972) 年

- 1 月 港町2丁目に公害監視センターを建設
- 4 月 さかえ保育所開所
- 6 月 都市計画道路青木立戸線開通
- 9 月 大瀧神社秋祭りの「奴行列」「山車」の風流を市指定重要文化財第1号に指定

写真49 完成した都市計画道路「青木立戸線」(現在のアルク前)のバス停付近から和木方面を眺めた写真。

写真50 市指定重要文化財第1号に指定された大竹祭りの奴行列の様子。



49



50

昭和48(1973) 年

- 4 月 なかはま保育所開所
- 6 月 下水処理場の一部が完成、和木町との下水道広域処理開始

昭和49(1974) 年

- 2 月 国鉄大竹駅の駅舎が完成し開業
- 4 月 本町保育所開所
- 4 月 第1回総合計画審議会開催
- 5 月 市制施行20周年を記念し「市民憲章」制定、クロガネモチを「市の木」、サツキを「市の花」に制定
- 5 月 市制施行20周年記念 第3回市産業祭開催
- 5 月 二階堂市長急逝
- 6 月 神尾徹生氏が2代目大竹市長に就任
- 7 月 青少年育成市民会議結成
- 9 月 玖波公民館(鉄筋コンクリート造2階建て)完成
- 12月 「公害追放都市宣言」

写真51 「市制施行20周年記念式典」が文化会館で行われた。

写真52 5月16日 市は市制施行20周年記念事業として、市の花に選定されたサツキの苗を市内各所で無料配布した。写真は当時、西栄1丁目にあった大竹生活協同組合本店(現在のやし鮮魚店)前で行われた配布風景。

写真53 5月18日 産業祭は昭和43(1968)年に始まり、翌昭和44(1969)年に市制施行15周年記念行事として第2回目が開催された。写真は、市制施行20周年記念行事として、5月18日から20日に行われた「第3回産業祭」の写真で、二階堂市長(当時)によるテープカットの瞬間である。二階堂市長は2日後の5月20日、急性心筋梗塞により急逝された。



51



52



53

昭和50(1975) 年

- 3 月 議員定数を30名から26名に減少する条例案を可決
- 3 月 「市総合計画基本構想」を制定
- 7 月 西栄2丁目に水道局の新庁舎開庁

写真54 西栄に水道局庁舎を新築した。現在この場所には「サントピア大竹」が建っている。



54

昭和51(1976)年

- 4月 市役所に初めて電子計算機を導入
- 12月 「総合基本計画」を策定

昭和52(1977)年

- 7月 「大竹市自治会連合会」設立
- 7月 大竹警察署庁舎完成
- 11月 中津井眞氏に「名誉市民第一号」の称号を贈呈
- 11月 大竹郵便局舎完成
- 12月 1日30tのゴミを処理する焼却場が東栄3丁目清掃センター内に完成

写真55 住みよいまちづくりをめざして「自治会連合会」設立総会が文化会館で開かれた。

写真56 「大竹警察署庁舎」(現庁舎)が完成した。



昭和53(1978)年

- 7月 皇太子殿下ご夫妻(現上皇・上皇后陛下)阿多田島をご視察
- 10月 亀居城跡第1次発掘調査

写真57・58 皇太子殿下ご夫妻が阿多田島をご視察された際の様子。



昭和54(1979)年

- 3月 大竹公共職業安定所新築移転オープン
- 3月 玖波小学校講堂完成(校舎は昭和53年3月完成)
- 4月 立戸保育所開所
- 4月 大竹中学校に夜間照明完成
- 5月 小島汚水中継ポンプ場完成
- 7月 亀居城跡第2次発掘調査

写真59 玖波小学校の写真。右側の講堂は昭和53年度に防衛施設庁の補助金を受けて、鉄筋コンクリート造2階建に改築された。



昭和55(1980)年

- 4月 市役所の新庁舎開庁
- 4月 総合体育館オープン
- 11月 大竹紙業株式会社事実上の倒産

写真60 市制施行以来、念願だった市役所庁舎を新築した。



昭和56(1981)年

- 2月 市コミュニティづくり推進協議会設立
- 3月 栗谷小学校谷和分校閉校
- 4月 栄公民館オープン
- 4月 栗谷農林振興センターオープン
- 5月 総合市民会館オープン
- 11月 第1回コミュニティ・フェスティバル開催
(総合体育館)
- 12月 阿多田海底送水管の布設工事が11月末に完了、通水式実施

- 写真61 市内39団体の代表が参加して「コミュニティづくり推進協議会」設立総会が文化会館で開かれた。
- 写真62 明治26(1893)年4月に開校した谷和分校は、88年間の歴史に幕を閉じた。
- 写真63 西栄3丁目に鉄筋コンクリート2階建ての栄公民館がオープンした。
- 写真64 「農林振興センター」の開館を祝って餅まきが行われた。
- 写真65 コミュニティ運動の推進を実践する中心的拠点となる「総合市民会館」がオープンした。



昭和57(1982)年

- 3月 玖波中学校が玖波4丁目に新築移転
- 3月 穂仁原小学校完成
- 4月 小方公民館および勤労者体育センターオープン
- 9月 「市新総合計画」策定
- 11月 「ふるさと大竹 産業祭・コミュニティフェスティバル」開催

- 写真66 玖波中学校は広島・岩国国道バイパス建設、および木造校舎部分の老朽化などにより移転改築となった。
- 写真67 穂仁原小学校は、昭和17(1942)年に建てられた校舎の老朽化により改築、鉄筋コンクリート造3階建てで建物の2階部分に体育館を併設していた。
- 写真68 市制施行時の市役所(旧小方町役場)の跡地に、小方公民館および勤労者体育センターが完成した。



昭和58(1983)年

- 1月 市内どの支所でも戸籍や印鑑証明を発行可能な「模写電送システム」を導入
- 3月 「大竹手すき和紙」が県無形文化財に指定され、大村調一さんを保持者に認定
- 3月 栗谷小学校校舎完成
- 4月 「第1回桜まつり」亀居城跡で開催、ミス大竹発表
- 11月 「亀居城跡」と「旧山陽道木野川渡し場跡」を市指定重要文化財に指定
- 12月 弥栄ダムのコンクリート打設式

- 写真69 栗谷小学校は、昭和35(1960)年に改築された木造校舎の傷みがひどく、小栗林510番地に移転改築された。
- 写真70 亀居城跡二ノ丸付近で行われた第1回「桜まつり」と「ミス大竹発表会」。



昭和59(1984) 年

- 7月 旧文化会館が増改築され「大竹会館」としてオープン
- 9月 市制施行30周年記念行事開催（9/16～11/18）
- 10月 小方港が、現在地（晴海）に移転
- 11月 住民基本台帳に漢字オンラインシステム導入

- 写真71 9月16日、総合市民会館周辺では市制施行30周年記念行事として「若人の集い」が行われた。
- 写真72 9月29日 市制施行30周年記念式典は総合市民会館で開催された。
- 写真73 大竹駅前に設置された記念モニュメント「和」。手がけたのは彫刻家の澄川喜一さん（元東京藝術大学学長、令和2年文化勲章受章、東京スカイツリーのデザイン監修で知られる）。
- 写真74 小方港は、小方沖海面埋立事業に伴って、旧小方公民館（現おがたピア）前の場所から現在地（晴海）に移転した。



昭和60(1985) 年

- 3月 阿多田島航路に新型フェリー就航
- 3月 大竹保育所改築工事完成
- 4月 印鑑登録証明事務をオンライン化
- 5月 大竹駅前商店街中央部に新しい商店街（ふれあい通り）誕生
- 8月 玖波中学校にナイター照明完成

- 写真75 阿多田島航路に17年ぶりに新型フェリーが就航、阿多田港では多くの島民が笑顔で出迎えた。
- 写真76 昭和37(1962)年建築の大竹保育所は築22年を過ぎており老朽化が激しく、改築された。



昭和61(1986)年

- 3月 松ヶ原小学校移転新築
- 3月 栗谷児童館完成
- 3月 三井東圧化学株式会社大竹工業所撤退
- 4月 市斎場供用開始
- 10月 名誉市民中津井眞氏市民葬

写真77 移転新築された松ヶ原小学校の校庭で一輪車に乗って落成を祝う子どもたち。

写真78 旧栗谷小学校跡地に、栗谷児童館が建設された。

写真79 老朽化が著しい大竹と小方の火葬場を統合した「大竹市斎場」を小方町小方に建設した。



昭和62(1987)年

- 3月 弥栄大橋開通
- 3月 小方中学校屋内運動場完成
- 3月 清掃センターに新焼却炉完成
- 3月 「市高齢者対策基本計画」策定
- 6月 亀居公園に作詞家石本美由起氏の詩碑「詩の坂道」完成、除幕式開催
- 12月 大竹市高齢者事業団（現公益社団法人大竹市シルバー人材センター）設立

写真80 「弥栄大橋」が開通。3世代による渡り初めが行われた。

写真81 亀居公園に設置された「詩の坂道」落成式において、「柿の木坂の家」の歌碑の前で撮影。中央が石本美由起氏で、左には歌手の林り子氏と作詞家で山口県出身の星野哲郎氏。右は作曲家の芥川也寸志氏と「柿の木坂の家」を歌った歌手の青木光一氏。



昭和63(1988)年

- 3月 広島岩国道路・山陽自動車道（大竹・岩国間）開通
- 4月 集団宿泊施設「大竹市自然の家やさか」オープン
- 4月 亀居公園に二ノ丸ステージ完成

写真82 3月29日 広島岩国道路・山陽自動車道の大竹―岩国間がこの日開通した。

写真83 4月10日 亀居公園では、この年、二ノ丸にステージが完成し、多くの市民が「桜まつり」のステージを楽しんだ。



平成元(1989)年

- 2月 市営黒川墓苑の使用者募集開始
- 4月 「市立図書館」オープン
- 6月 防鹿に「手すき和紙の里」オープン
- 6月 作詞家石本美由起氏に「大竹市名誉市民」の称号と名誉市民章を贈呈
- 9月 24時間のマラソンイベント「エキサイティングウェーブ・イン・大竹'89」を小方沖埋立地（現晴海地区）で開催

- 写真84 待望の「図書館」が総合市民会館に隣接して建設された。
- 写真85 5月14日 第9回市民まつり。
玖波青木線の道路を埋め尽くすように、青木方面から、商工会議所へ向かって進む、総勢420人の自治会連合会婦人部（現自治会連合会女性部）の踊りは圧巻のパフォーマンスだった。
- 写真86 紙すき道具や作業工程の見学、自分で紙をすく「体験コーナー」などがある施設「手すき和紙の里」が防鹿にオープンした。
- 写真87 郷土出身の作詩家石本美由起氏に市長から「大竹市名誉市民」の称号ならびに名誉市民章が贈られた。
- 写真88～91 小方沖埋立地（現晴海地区）で開催されたマラソンイベント「エキサイティングウェーブ・イン・大竹'89」。



84



85



86



87

◀ギネス記録に挑戦した
「ジャンボ折り鶴」



88

▶ギネス記録に挑戦した
「ジャンボ折り鶴」



89



真夜中に激論した「21世紀の大竹を語る」



91

フィナーレで、「ワイ・アー・ザ・ワールド」を熱唱する
神尾市長をはじめ若者たち

平成2 (1990) 年

- 4月 大竹会館講堂が「アゼリアホール」としてオープン
- 4月 総合市民会館などの施設の管理・運営を行う財団法人大竹市文化振興事業団設立
- 4月 市役所の財務会計オンラインシステム始動
- 4月 小方町小方に学校法人ルネス学園「大竹総合科学専門学校」開校
- 7月 第3代大竹市長に豊田伊久雄氏就任
- 7月 「青少年海外派遣事業」スタート（市内在住の中学生20人韓国派遣）
- 9月 養護老人ホーム「ゆうあいの里」オープン
- 10月 「阿多田小学校屋内運動場」完成
- 10月 大竹駅前商店街のカラー舗装道路完成、商店街の名称「スペイン通り」と命名
- 10月 弥栄ダム完成
- 11月 広島岩国道路大竹一大野間開通

写真92 大竹会館講堂が体育館としても利用できる多目的ホール「アゼリアホール」がオープンした。

写真93 小方町小方に「大竹総合科学専門学校」が開校。人間行動学科と自然健康学科の2つのコースがあった。

写真94 昭和35(1960)年に建設された養護老人ホーム「松寿園」が老朽化したため、玖波4丁目に移転・改築、「ゆうあいの里」としてオープンした。



平成3 (1991) 年

- 3月 「木野小学校屋内運動場」完成
- 4月 「社団法人大竹市シルバー人材センター」設立
- 4月 栗谷町広原地区のは場整備完了
- 5月 都市計画道路玖波青木線（湯舟団地入口交差点～県道大竹湯来線間）開通
- 6月 大竹中学校屋内運動場完成
- 6月 「青少年健全育成推進都市」宣言
- 8月 全国初のダムウォータースポーツを楽しむイベント「'91弥栄湖スポーツフェスティバル」開催

写真95 木野小学校の屋内運動場が建て替えられた。

写真96・97 都市計画道路「玖波青木線」が開通、テープカットの後、なかはま保育所の子どもたちが「歩き始め」をして完成を祝った。

写真98 「大竹中学校屋内運動場」が完成し、6月24日落成式が行われた。

写真99・100 この年から始まった「弥栄湖スポーツフェスティバル」。



湖上での白熱した激戦が繰り広げられたドラゴンボート大会は人気の種目で、第1回大会から、平成19(2007)年の最後の開催まで継続した種目だった。

平成4 (1992) 年

- 3月 前大竹市長神尾徹生氏に「大竹名誉市民」の称号ならびに名誉市民章を贈呈
- 3月 川真珠貝広場（魚切地区）キャンプ場完成
- 4月 社団法人大竹市シルバー人材センター（現公益社団法人大竹市シルバー人材センター）が大竹駅前に「大竹駅西駐車場」を開設
- 10月 浅生塚・芦路塚を市指定重要文化財に指定

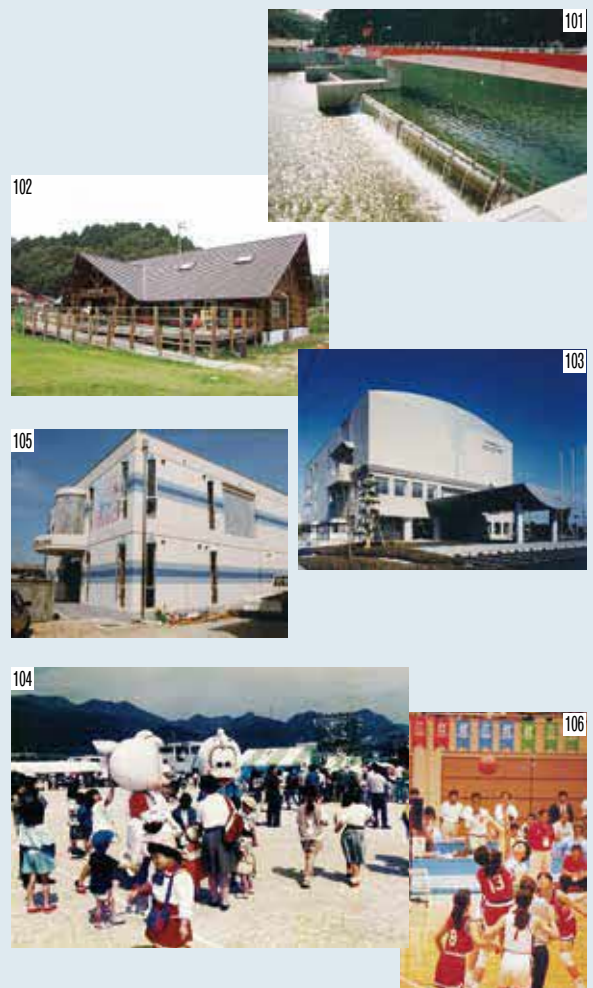
平成5 (1993) 年

- 4月 木野郵便局が移転、業務を開始
- 5月 特別養護老人ホーム「ゆうあいホーム」オープン
- 6月 広島税関大竹監視署閉署
- 6月 「阿多田児童館」完成
- 6月 第三次総合計画策定
- 8月 毎月第1日曜日を「全市門前清掃の日」とし、自宅や事業所の周辺を一斉に清掃する運動をスタート

平成6 (1994) 年

- 2月 昭和26年に建設された中市堰の改修工事竣工
- 3月 市議会議員定数を24名から22名に減少の議決
- 4月 ログハウス工法の「松ヶ原児童館」オープン
- 4月 「栗谷中学校屋内運動場」完成
- 5月 市総合福祉センター「サントピア大竹」オープン
- 6月 三ツ石浄水場通水式
- 7月 水道局舎が市役所本庁東側に隣接して完成
- 7月 「コミュニティサロン元町」オープン
- 9月 市制施行40周年記念式典で市のシンボルマークを発表
- 10月 第12回アジア競技大会広島1994開催、10/3～10/10の8日間総合体育館でバスケットボール競技実施
- 10月 市営立戸墓苑（368区画）の使用者募集開始

- 写真101 中市堰は昭和60(1985)年から9年の歳月と約47億円の費用をかけて改築工事を進め完成した。旧中市堰の65m下流に造られ、上部に歩道橋を備えている。
- 写真102 ログハウス工法で建設された「松ヶ原児童館」。建物の前に200㎡のサンデッキが取り付けられているのが大きな特徴だった。平成16(2004)年からは、松ヶ原こども館「あっぱつぶ」として活用されている。
- 写真103 在宅福祉および地域福祉推進の拠点となる総合福祉センター「サントピア大竹」が完成した。
- 写真104 5月14日 この年の10月3日から10日までの8日間、市総合体育館で開催が予定されている「アジア大会」(バスケットボール予選会場)のPR活動として、市民まつりの会場に登場したアジア大会のマスコットキャラクターポッポとクック。子どもたちの人気の的だった。
- 写真105 誰でも気軽に、エプロンがけ、サンダル履き感覚で利用できる「コミュニティサロン元町」が完成した。
- 写真106 「第12回アジア競技大会広島1994」が開催され、総合体育館はバスケットボール予選会場となった。



平成7 (1995) 年

- 1 月 阪神大震災が発生、消防本部から工作車と消防士5名を即日派遣
- 5 月 「大竹小学校屋内運動場」完成
- 8 月 「大竹市子ども市議会」開催
- 10月 立戸2丁目に「大竹市休日診療所」(内科系)開設
- 12月 ごみ収集をダストボックス方式から指定袋を使うステーション方式に変更

写真107 昭和40(1965)年から使われていた市体育館を取り壊し、大竹小学校の屋内運動場が新築された。2階には1周130mのランニングコースが設けられている。

写真108 「休日診療所」が立戸2丁目に開設された。



平成8 (1996) 年

- 3 月 国体山岳登山競技用施設「マロンウォールみくら」が三倉平駐車場に完成
- 3 月 消防庁舎が立戸1丁目に新設・移転
- 4 月 「コミュニティサロン栄町」オープン
- 7 月 集団宿泊研修施設「大竹市海の家あたた」、灯台資料館(旧灯台職員官舎等)オープン
- 7 月 「弥栄オートキャンプ場」オープン
- 10月 第51回国民体育大会秋季大会(卓球競技・山岳登山競技)開催(10/13~17)

写真109 国体山岳登山競技用施設の人工登山壁「マロンウォールみくら」が完成した。高さ28.4mの山の字型をしている。

写真110 昭和39(1964)年建築の消防庁舎を、立戸1丁目に2カ年計画で新築移転した。

写真111 コミュニティサロン2号館として「コミュニティサロン栄町」がオープンした。

写真112 集団宿泊研修施設「海の家あたた」オープン。隣接の旧灯台職員官舎を改築「灯台資料館」としてオープン。

写真113 小瀬川の清流と豊かな緑に包まれた弥栄周辺広場に、新たに「オートキャンプ場」が整備された。

写真114 総合体育館で行われた卓球競技では、自治会ごとに民泊した各県の選手を自治会あげて応援した。



平成9 (1997) 年

- 3月 ゆめタウン大竹が晴海地区に開業
- 3月 栗谷町に「玖島川親水公園」完成
- 3月 「生涯学習都市おおたけ」を宣言
- 3月 大瀧神社の「所家文書」のうち軸装巻物1巻と書状1通を市指定重要文化財に指定
- 4月 旧栗谷小学校跡地に新築移転した「栗谷診療所」開所
- 6月 「コミュニティサロン玖波」オープン
- 10月 「大和橋」が架け替えられ開通
- 11月 「産業まつり」と「市民まつり」を一つにした「コイ♡こいフェスティバル」開催

- 写真115 栗谷町に「玖島川親水公園」が完成した。
 写真116 コミュニティサロン3号館として「コミュニティサロン玖波」がオープンした。
 写真117 架け替えられた「大和橋」の渡り初め。
 写真118 「コイ♡こいフェスティバル」のステージは、和木町から借用したもので屋外に設置されていた。



平成10 (1998) 年

- 3月 松ヶ原地区の上水道通水
- 4月 防災行政無線運用開始
- 12月 市議会議員定数を22名から21名に減少の議決

平成11 (1999) 年

- 4月 障害者福祉基本計画「おおたけ・ふれあいプラン」策定
- 4月 「阿多田診療所」開所
- 8月 男女共同参画行動計画「おおたけ男女共同参画プラン」策定
- 10月 休日診療所で外科系の診療を開始
- 10月 「油見トンネル」開通（長さ1,125m）
- 11月 市公式ホームページを開設

- 写真119 無医地区である阿多田地区住民の医療受診の利便を図るため、老朽化していた診療所を改築した。
 写真120 「油見トンネル」の開通式の様子。



平成12(2000) 年

- 1 月 市制45周年を記念して名誉市民の石本美由起氏から寄贈された「いざいざ共に」を市民歌に制定
- 4 月 介護保険制度スタート
- 4 月 情報公開制度スタート
- 5 月 「マロンの里交流館」オープン
- 6 月 平成13年度から3年間で取り組む行財政改革の指針として「行財政改革大綱」を策定
- 11月 第15回国民文化祭「文芸祭川柳大会」開催
- 11月 第15回国民文化祭「ジャズダンスフェスティバル」開催
- 12月 県境を結ぶ大和橋周辺を舞台に和木町と合同で「21世紀を祝うつどい」開催
- 12月 第四次大竹市総合計画策定

- 写真121 栗谷町に、地域の農産物・加工食品・工芸品などの直販や、地域食材を利用したレストランがある「マロンの里交流館」がオープンした。
- 写真122 第12回国民文化祭ひろしま2000「文芸祭（川柳大会）」をアゼリアホールで開催された。
- 写真123 第12回国民文化祭ひろしま2000「ジャズダンスフェスティバル」を総合体育館で開催された。



平成13(2001) 年

- 3 月 芸予地震発生（市域は震度5弱）
- 4 月 「行財政改革大綱」に基づき具体的な改善事項を定めた「大竹市行財政システム改善実施計画」策定
- 4 月 中華人民共和国都江堰市との友好都市締結
- 7 月 栗谷地区の消防防災体制充実のため、女性消防団発足

- 写真124 江訪日団長（左）と豊田市長（右）は固い握手を交わし両市の友好協力を約束した。



平成14(2002) 年

- 1 月 「第1回おおたけカキ水産まつり」開催
- 4 月 第1回亀居城まつり開催
- 4 月 市内小中学校完全学校週5日制実施
- 4 月 防犯組合連合会と地域安全推進協議会が一つになり31団体で構成する「大竹市防犯連合会」発足
- 5 月 ペットボトルおよびトレーその他のプラスチック分別収集開始
- 6 月 「市民スポーツ広場」がJRコンテナ基地跡に完成
- 6 月 第4代大竹市長に中川洋氏就任
- 7 月 市内巡回バス実証運行（9/30まで）
- 8 月 「住民基本台帳ネットワークシステム」（住基ネット）が全国一斉に稼働

- 写真125 晴海第一公園（現JAひろしま晴海支店周辺）で行われた「第1回おおたけカキ水産まつり」の様子。



平成15(2003) 年

- 1 月 ごみ固化燃料施設「夢エネルギーセンター」本格稼働
- 3 月 広島法務局大竹出張所が広島法務局廿日市支局に統合され廃止
- 3 月 市議会本会議の様子が市役所 2 階ロビーのテレビで視聴可能
- 3 月 市議会議員定数を21名から18名に減少の議決
- 3 月 木野小学校前の小瀬川河川敷に「水辺の楽校」完成
- 4 月 「子ども相談室」と「子育て支援センター」オープン
- 4 月 生涯学習課が総合市民会館へ移転、市役所 1 階に各種団体の事務を行う団体総合事務局を設置
- 4 月 合併特例法の改正に伴い平成11(1999)年 4 月から始まった「平成の大合併」で市は 2 回の各地区住民説明会を開くなど、住民の声を聴いたうえで当分の間単独市制を堅持することを決定
- 6 月 安条トンネル開通
- 7 月 市内社会教育施設の休館日、開館時間、使用料（1 時間単位になった）変更
- 8 月 第 1 回「木野両国夏まつり」開催
- 12 月 公職選挙法が改正され期日前投票制度を創設

写真126 市民から排出された燃やすごみを原料にして固化燃料を製造、福山市にある火力発電所の燃料として使われた。

写真127 「第 1 回木野両国夏まつり」(尻相撲) が小瀬川河川敷の「水辺の楽校」で開催された。



平成16(2004) 年

- 3 月 ログハウスで親しまれた「松ヶ原児童館」閉館
- 4 月 図書館長、各地区公民館長を一般公募し採用
- 4 月 市立小・中学校は校内の禁煙実施
- 4 月 「情報公開コーナー」を市役所 2 階ロビーに開設
- 4 月 栗谷支所、木野支所の開庁時間を 9 時から16 時までに変更
- 5 月 「栄 B 地区自治会連合会（現小島地区自治会連合会）」が市内で初の自主防災組織を結成
- 6 月 平成15年12月に制定された「大竹市住民投票条例」施行
- 6 月 都市計画道路「中市立戸線」開通
- 7 月 松ヶ原こども館（旧松ヶ原児童館）「あっぷっぷ」オープン
- 9 月 「市制施行50周年記念式典」をアゼリアホールで開催
- 11 月 市立図書館ホームページを開設

平成17(2005) 年

- 3月 県立大竹高等学校の定時制が閉課程
- 3月 市制施行50周年記念事業として市役所を舞台にフィナーレイベント「50年だよ！全員集合！」開催
- 3月 元町4丁目にある薬師寺の「宝篋印塔」と小方の「けごろもの碑」を市指定重要文化財に指定
- 4月 大竹駅隣に「サイクルパーク大竹自転車駐車場」がオープン
- 4月 「さかえ保育所」が民営化され社会福祉法人「ひまわり福祉会」に運営委託
- 4月 「二葉保育所」閉所
- 7月 国立大竹病院「独立行政法人国立病院機構広島西医療センター」移行
- 9月 台風14号により大きな被害が出る
- 11月 「戦後60メモリアルイベント」を開催

写真128～130 市役所で開催された市制施行50周年記念行事のフィナーレイベント「50年だよ全員集合！」の様子。

写真131・132 9月6日 市域を襲った台風14号の爪痕。



子ども議会の様子



川真珠貝広場付近の国道186号



栗谷町大栗林の大屈橋付近の玖島川

平成18(2006) 年

- 1月 「成人の集い」を新成人から公募により選出された「成人式企画実行委員会」が企画運営する方法に変更
- 3月 「地域防災計画」を策定
- 3月 水深11mの岸壁を持つ大竹港完成
- 4月 玖波を除く2館のコミュニティサロン（元町、栄町）の管理運営を指定管理に変更
- 4月 県の事務・権限の一部が大竹市に移譲
- 4月 水道局と下水道課を統合し「上下水道局」を設置
- 4月 小学校に30人を基準とする少人数学級導入のための「構造改革特別区域」に認定
- 4月 「学校選択制度」を導入
- 4月 「大竹市地域包括支援センター」をサントピア大竹内に設置
- 6月 栄公民館内に住民票・印鑑証明書を交付する「栄サービスコーナー」を設置
- 6月 栗谷町大栗林の「森崎家文書」を市指定重要文化財に指定
- 6月 第5代大竹市長に入山欣郎氏が就任
- 7月 栗谷町後原地区のは場整備が完成
- 8月 中学生の職場体験「キャリア・スタート・ウィーク」がスタート
- 9月 市内小・中学校は、不審者や災害情報を保護者に伝えるため、携帯電話のメールを使った連絡網システムを導入

写真133 中学生の「キャリア・スタート・ウィーク」で市の窓口業務を体験する生徒たち。



平成19(2007) 年

- 3月 「玖波駅前自転車駐車場」がオープン
- 3月 松ヶ原こども館「あっぷっぷ」に大型複合遊具「森の遊園地」を設置
- 3月 市議会議員定数を18名から16名に減少の議決
- 4月 地方自治法の改正により、助役は副市長になり、収入役は廃止
- 4月 市民活動団体が、地域の課題を解決するために提案・実施する事業を支援する「市民活動支援事業」がスタート
- 6月 パスポートの申請・交付事務開始
- 6月 小方1丁目の「和田家文書」を市指定重要文化財に指定
- 6月 戸籍のコンピュータ処理スタート
- 7月 栗谷町谷和地区のほ場整備が完成
- 10月 郵政民営化により郵便局が民営化
- 10月 教育委員会は、学校選択制度を有効に活用してもらうために各学校による「学校公開」を開始
- 12月 大竹港から大韓民国釜山へ向けてコンテナ定期航路開設

写真134 松ヶ原こども館あっぷっぷに、大型複合遊具「森の遊園地」が完成。30種類以上のアイテムを備えた幅広い対象年齢が楽しめるものとなっている。



平成20(2008) 年

- 3月 市消防本部、消防団が消防庁長官表彰を受章
- 3月 松ヶ原小学校が閉校
- 3月 「地域公共交通活性化協議会」設立
- 3月 学校法人ルネス学園広島医療体育学院専門学校閉校
- 4月 後期高齢者医療制度がスタート
- 7月 「大竹市地域福祉計画」を策定
- 9月 大竹港の愛称が公募により「あこがれみなと」に決定
- 9月 商工会議所60周年記念で大竹港に客船「銀河」入港

写真135 大竹市消防本部、消防団が全国149機関の代表として「消防庁長官表彰」を受章した。

写真136 大竹港に入港した客船「銀河」。



平成21(2009)年

- 1月 大竹港「ポート・オブ・ザ・イヤー 2008」受賞
- 2月 5万トンを超える大型石炭船が大竹港に入港
- 3月 「市地域公共交通総合連携計画」を策定
- 4月 団体総合事務局を廃止
- 4月 都市計画税を税率0.1%で導入
- 7月 平成21年7月中国・九州北部豪雨(職員派遣)
- 10月 三ツ石地区の支線交通「三ツ石乗合タクシー」の実証運行を開始
- 10月 JR大竹駅とJR玖波駅を結ぶ幹線交通「おおたけ幹線バス」の実証運行がスタート

写真137 5万トンを超える大型石炭船が大竹港（あこがれみなと）に入港した。

写真138 「三ツ石乗合タクシー」は、市域で初めての公共交通の仕組みで、坂道の多い三ツ石地区の住民に喜ばれた。

写真139 実証運行は市内タクシー業者2社所有のマイクロバスでスタートした。



平成22(2010)年

- 3月 松ヶ原集会所完成
- 4月 乳幼児医療制度を入・通院とも小学校卒業までに拡充
- 4月 防災行政無線（デジタル同報系）の運用を開始
- 4月 環境基本条例を施行
- 6月 「大竹市公共交通活性化協議会」が公共交通の取り組みで、中国地方初の国土交通大臣表彰を受賞
- 11月 マルチメディア拠点「大竹メディアステーション」（愛称みくらす）がオープン
- 12月 ケーブルテレビスタート

写真140 「大竹メディアステーションみくらす」が大竹駅前にオープンした。



平成23(2011)年

- 1月 晴海臨海公園のテニスコートがオープン
- 3月 マグニチュード9.0、震度7の東日本大震災発生（職員派遣）
- 3月 木野小学校閉校
- 3月 第五次大竹市総合計画「わがまちプラン」が完成
- 3月 「環境基本計画」策定
- 4月 さかえ保育所内に「さかえ子育て支援センター」がオープン
- 5月 「おおたけ幹線バス」の愛称を公募により「こいこいバス」に決定
- 6月 大竹小学校の校舎の建て替えと芝生グラウンドの整備が完了
- 7月 「玖波7丁目乗合タクシー」の実証運行開始

写真141 小学校の校舎は以前のグラウンドに建て替えられ、逆に校舎があった場所は芝生のグラウンドになっている。



141

平成24(2012)年

- 1月 「玖波7丁目乗合タクシー」が玖波8丁目にも拡大し「ひまわりタクシー」として実証運行開始
- 1月 「湯舟乗合タクシー」の実証運行開始
- 2月 栄町地区と大竹駅を結ぶ支線交通「栄ぐるりんバス」の実証運行開始
- 4月 市の奨学金制度に返還免除制度を追加
- 4月 オレンジ色のデザインでラッピングした低床型の新型車両になった「こいこいバス」と、「三ツ石乗合タクシー」が本格運行に移行
- 4月 消防署がメールで119番通報できる「電子メール119」の運用開始
- 7月 大願寺地区造成地の町名が公募により「小方ヶ丘」に決定
- 7月 市は基幹業務システムをクラウド化運用開始
- 12月 市消防本部に化学機動隊「OTAKE・HAZMAT」が発隊

写真142 「こいこいバス」に、公募した新しいデザインでラッピングされたオレンジ色の低床型車両を導入した。

写真143 災害に対する体制を強化し、重大な化学災害にも対応可能な、化学災害専門の精鋭部隊「OTAKE・HAZMAT」を発隊させた。



142



143

平成25(2013)年

- 3月 穂仁原小学校閉校
- 3月 阿多田小学校閉校
- 4月 市営住宅の維持管理業務に指定管理者制度を導入
- 4月 小方小・中学校が小方ヶ丘に移転、小・中一貫校「小方学園」として開校
- 4月 「大竹市給食センター」稼働開始
- 5月 「財団法人大竹市文化振興事業団」を解散
- 6月 市公式フェイスブックページを開設
- 7月 外国人住民も加えた住民基本台帳ネットワークシステム（住基ネット）の運用を開始
- 10月 燃やすごみと粗大ごみに「ごみ処理手数料」を導入

写真144 上空から見た「小方学園」、隣接して「給食センター」も建設された。



平成26(2014)年

- 3月 木野集会所完成
- 4月 広島西医療センター内に病児・病後児保育室「にっしーくんハウス」がオープン
- 7月 亀居城関連遺跡第1次発掘調査（平成27年2月2日まで）
- 8月 市制施行60周年職員協働事業「おおたけっ子みらい会議」（子ども議会）開催
- 8月 「市制施行60周年記念式典」がアゼリアホールで開催
- 8月 二階堂和美さん作詞・作曲による新しい歌「大竹で生きている」とバンブー倶楽部が手掛ける市のイメージソング、応援ソングが誕生
- 9月 栗谷中学校が閉校
- 11月 大竹・小方・玖波の奴行列が一堂に会して練り歩くイベント開催
- 11月 おおたけPRキャラクターにコイちゃんが決定
- 11月 市制施行60周年記念事業、閉校した小学校の不要になった学校用品を売却する「廃校ノスタルジア」開催

写真145 病児・病後児保育室「にっしーくんハウス」が広島西医療センター内にオープンした。

写真146 大竹を拠点に活躍する人気アーティスト二階堂和美さん作詞・作曲による大竹の新しい歌「大竹で生きている」のCDジャケット。演奏は市内の大竹吹奏楽クラブが担当している。



平成27(2015) 年

- 3月 玖波公民館の自主事業「地域ジン学びのカフェ」が、最優秀館に選出
- 4月 「晴海臨海公園球技場・管理棟」オープン
- 4月 「大竹市子ども・子育て支援事業計画」を策定
- 4月 「大竹市公立保育所等の今後のあり方」を策定
- 4月 「よりそいサポートセンター」をサントピア大竹内に設置
- 5月 亀居城関連遺跡第2次発掘調査（平成28年1月22日まで）
- 7月 広島県西部認知症疾患医療センターに地域包括支援センター・認知症初期集中支援チーム・認知症地域支援推進員を併設した全国で初めての「合併型センター」を開設
- 7月 防災情報、気象情報をメールで受け取る「大竹市防災情報等メールサービス」を開始
- 9月 JR玖波駅に西口広場と駅舎が新しく整備され利用を開始

写真147・148 晴海臨海公園は、テニスコート6面（うち3面は夜間照明完備）、球技場（野球・サッカーなど対応・夜間照明完備）を備えたスポーツを楽しめる施設。

写真149 JR玖波駅の利便性の向上を目的に玖波駅西口広場および駅舎が整備された。



平成28(2016) 年

- 9月 小方公民館閉館
- 10月 阿多田島郵便局で住民票等の交付を開始

平成29(2017) 年

- 3月 玖波小学校改築完成
- 3月 栄橋の架け替え工事が完了
- 3月 両国橋の架け替え工事が完了
- 7月 平成29年7月九州北部豪雨発生（職員派遣）
- 9月 国道186号御園バイパス防鹿トンネル(770m) 開通

写真150 建て替えていた玖波小学校の校舎が完成した。



平成30(2018)年

- 1月 「自治会連合会結成40周年記念大会」をアゼリアホールで開催
- 3月 栄町地区の公共交通を定時路線型のバスから区域運行型の「乗合タクシー」へ変更
- 3月 「称名寺の喚鐘」と「大歳神社の力量石」を市指定重要文化財に指定
- 4月 旧小方公民館が市地域福祉会館「おがたピア」として開館
- 4月 国民健康保険制度が市単独から県との共同運営に変更
- 4月 晴海臨海公園に大型複合遊具広場「ロボボ」がオープン
- 7月 平成30年7月西日本豪雨発生（職員派遣）
- 7月 御園台地区とゆめタウンを結ぶ乗合タクシー「あじさいタクシー」運行を開始

写真151 地域福祉会館「おがたピア」が完成し、開館式を正面玄関前で行った。

写真152 晴海臨海公園に大竹の工場をイメージしたカラフルな大型の複合遊具「ロボボファクトリー」が誕生した。



平成31・令和元(2019)年

- 3月 公共下水道工事完了（防鹿地区）
- 4月 栗谷小学校を休校
- 4月 「おおたけ手すき和紙の里」がリニューアルオープン
- 4月 廿日市市と可燃ごみの広域処理開始
- 7月 旧松ヶ原小学校を改築し障害者福祉施設「おおたけ松美園」オープン
- 8月 市議会議員一般選挙、市制施行以来初の無投票
- 10月 「こいこいバス」（幹線バス）運行10周年、累計利用者100万人突破

写真153 「おおたけ手すき和紙の里」にこれまでの作業場に加え、体験学習やワークショップが開催できる体験学習棟が完成した。



令和2(2020)年

- 3月 新型コロナウイルス感染拡大防止のため市内小・中学・高等学校一斉休校
- 4月 大竹、小方、玖波の放課後児童クラブ（学童保育）を民間委託
- 4月 亀居城関連遺跡第3次発掘調査（令和3年3月12日まで）
- 6月 晴海臨海公園にデイキャンプ場オープン

写真154 晴海臨海公園に「デイキャンプ場」が完成した。



令和3(2021)年

- 2月 大竹会館の建て替えとアゼリアホールの改修工事が完了、「アゼリアおおたけ」としてオープン
- 3月 市のイメージアップと地域の活性化のため自らの活動を通じてまちの魅力を発信してもらう「大好き大竹応援大使」の制度がスタート
- 4月 総合市民会館3階の勤労青少年ホームを廃止、中央公民館に変更
- 4月 市税や国民健康保険料、市営住宅使用料などバーコード付き納付書でスマホやコンビニから納付可能
- 4月 亀居城関連遺跡第4次発掘調査（令和3年10月8日まで）
- 4月 「まちづくり基本構想」を策定
- 5月 新型コロナウイルス感染症ワクチンの集団接種開始
- 11月 「県立大竹高等学校創立100周年記念式典」举行

写真155 大竹会館が「アゼリアおおたけ」となってリニューアルオープンした。

写真156 県立大竹高等学校は、大正時代に「大竹女子実業補習学校」として開校してから100年を迎えた。



155



156

令和4(2022)年

- 3月 住民票等コンビニ交付サービス開始
- 3月 なかはま保育所、立戸保育所閉所
- 4月 小方認定こども園と子育て支援センター「にじいろこども園」開設

写真157 市役所の隣地に小方認定こども園と子育て支援センター「にじいろこども園」が開園した。



157

令和5(2023)年

- 2月 大竹駅自由通路と橋上駅舎供用開始
- 3月 下瀬美術館が晴海にオープン
- 4月 小・中学校の給食を完全無償化
- 4月 小方港～阿多田島航路に新造船「悠風（はるかぜ）」就航
- 5月 白石1丁目に造成した「市営白石墓苑」の利用者募集開始
- 9月 大竹小学校のプール改築完成
- 10月 早朝から市内の3/4に当たる9544世帯で断水が発生

写真158 市の玄関口であるJR大竹駅の東西を結ぶ自由通路・橋上駅舎が完成し、供用を開始した。

写真159 下瀬美術館が晴海にオープンした。建築界のノーベル賞と称される「プリツカー賞」を受賞した坂茂氏が設計を手掛けている。

写真160 小方港～阿多田島航路に新型フェリー「悠風（はるかぜ）」が就航した。



158



159



160

令和6（2024）年

- 1月 能登半島地震発生（職員派遣）
- 1月 第1回「瀬戸内リレーマラソンin大竹」晴海臨海公園で開催
- 3月 本町保育所閉所
- 4月 地籍再調査事業開始
- 6月 市LINE公式アカウントの運用を開始
- 8月 熱中症対策を推進するため、指定暑熱避難施設「クーリングシェルター」として公共施設を市民などに開放
- 9月 「市制施行70周年記念式典」をアゼリアホールで開催
- 9月 市制施行70周年を記念してJR大竹駅の東口に水色のコイちゃん、西口に赤いコイちゃんがデザインされた郵便ポストを設置
- 9月 木野支所を廃止
- 10月 市の事務の一部を木野郵便局に委託、住民票等の交付を開始
- 12月 下瀬美術館がユネスコによる建築賞（美術館・博物館部門）で最優秀賞の「ベルサイユ賞」を受賞

写真161 第1回「瀬戸内リレーマラソンin大竹」が晴海臨海公園で開催された。

写真162 「市制施行70周年記念式典」をアゼリアホールで開催した。

写真163～167 市制施行70周年記念事業「まるごとフェスタ」がアゼリアおおたけの内外で開催された。

写真168 市制施行70周年を記念して青い「コイちゃん郵便ポスト」がJR大竹駅東口に設置され、入山市長が初投函した。（西口は赤い郵便ポスト）



市制施行70周年記念誌

振り返る70年

発行 令和7年3月 大竹市

編集 大竹市総務部企画財政課

印刷 株式会社ニシキプリント

